ＩＳ　ＶＳ　霊子甲冑　～『白』の二重奏～

山上真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　ＶＳ　霊子甲冑　～『白』の二重奏～

【Ｎコード】
Ｎ４４６６Ｙ

【作者名】
山上真

【あらすじ】
ＩＳという兵器の登場によって女尊男卑の世となった昨今。
そんなある日、あるニュースが世界を騒がせる。
それを契機に、秘密部隊『帝国華撃団・花組』隊長の大神総一はある任務を言い渡される。
サクラ大戦シリーズとＩＳのクロスです。
主人公はオリ主と一夏。
時代的にサクラ大戦側はオリキャラで固められています。
キャラ改変、独自解釈、捏造設定があります。

個人的にはシリアス路線だと思ってます。
原作を読み返しつつ、ある程度書きためてからの投稿になるので不定期更新となります。
感想お待ちしております。
１１／２２：ちょっとタイトル変更しました。

プロローグ（前書き）

リハビリがてら書いてみました。
楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

「おおおおーーっ！」
「はあああああーーっ！」

響き渡るは少年少女二人の咆哮。僅かに遅れ、甲高い音が断続的に鳴り響く。……見れば、二人の手にはそれぞれ刀が握られている。

模擬刀かと思えば然にあらず。紛う事なき真剣である。

ＩＳというものが世に広く浸透している昨今を考慮しても、それはおかしな光景だった。

二人の年頃はどう贔屓目に見ても十代半ば。それでいながら、二人は己の手足の如く刀を扱っている。一心同体と言っても過言ではなかった。

であればこそ、尚のこと腑に落ちない。

スポーツとして広まっているＩＳがその実兵器であることを鑑みれば、少女に関しては無理矢理だが説明付けることが可能だ。『長らくＩＳと共にあり、刀を武器としている』……と。

しかし、少年に関してはそうもいかない。……何故ならば、ＩＳは女性にしか動かせないのだ。それが絶対とは言えないが、常識として扱われているほどに可能性が低いのもまた事実。

では、この光景が示しているのは一体何なのか？

「いや、久々にいい訓練になった。礼を言うよ、桜華（おうか）」
「フフ……それはこちらのセリフだよ、大神総一（おおがみそういち）隊長？」

二人の会話の中に、その答えの片鱗があった。

どうやら二人は軍人か何からしい。ＩＳが兵器としての地位を占める昨今では非常に珍しいことではあるが、だとするならば両者の技量にもいくらか納得がいく。――それでも、その年齢に対する疑

問は尽きないが。

「……嫌みを言うのは止めて欲しいな、真宮寺（しんぐうじ）の姫君？」

「それは失礼。だがこれ位は許してもらいたいな？　任務に守秘義務があるのは理解しているが、私たちの間ではそれも幾らか緩和される。隊長が長期に渡って隊を離れるというのに、副隊長の私は司令から伝えられるまでその事実を一切知らなかったのだからな？」

ジト目で言ってくる桜華に対し、総一は謝るほかになかった。

世界各国が秘密裏に連携して行っている、霊的なモノに対する都市防衛機構『華撃団』。……諜報、輸送、戦闘など様々な隊から成っており、総一は日本における戦闘部隊の隊長である。

霊的なモノに対処する以上、戦闘部隊員は強い霊力を保有していることが最低条件なのであるが、同時にそこが問題点でもあった。

世界は広く、霊力の保有者は山ほど存在している。――しかし、戦闘時におけるパワードスーツ『霊子甲冑（りょうしかっちゅう）』を起動できるほどに強い霊力保有者となるとそうはいかない。

突然変異を除けば、ある程度血統を頼ることは出来る。事実、総一も桜華もそのクチだ。特に桜華の生まれである真宮寺家は『破邪の血統』と謳われるほどで、代々強力な霊力保有者が現れている。

それでも限度というものがあり、戦闘部隊は常々人員不足に悩まされている。

強い霊力保有者は基本的に若い女性に多く、総一のように男性でありながら強い霊力を保有しているのは非常に稀だ。……歴代隊員の血統でも、男であれば霊力を持っていない、というのはザラである。

今回、総一が隊を離れていたのもそんな人員不足によるものであり、いくら慌ただしかったとはいえ、それを桜華に伝え忘れたのは明らかに総一のミスなのである。……親しすぎるが故の弊害であった。

その血統故に幼い頃から交流を持ち、互いに切磋琢磨しあって来た二人は、大概のことを言葉にせずとも察することが出来る。
それに違わず、桜華も総一が隊を離れている事実及びその理由を察してはいた。これが私事であれば然程問題もないのであろうが、生憎と公務である。
察しは出来てもそれが正しいとは限らない以上、事実確認は必要なのだ。
今回は桜華が誤魔化したために事なきで済んでいるが、これが発覚した場合は面倒事が舞い込むだろう。司令から『頼み事』という名を借りた実質的な処罰が下される。
総一個人で済めばいいが、そんな美味い話はないだろう。何かしら周りを巻き込むハメになる。

「……本当にすまん」

それを理解しているからこそ、総一は謝るしかないのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……疲れた」

桜華と別れてから数時間後、総一は肩で息をしていた。
戦闘部隊隊長とはいえ戦闘ばかりしているわけでなく、寧ろそれ以外の仕事の方が圧倒的に多い。
まずは離れていた期間に溜まった書類仕事。それが終わったら歌唱訓練である。
古来より、歌と踊りには魂を鎮める効果があるとされている。
故に、華撃団に所属する者たちは表向きの顔として芸能プロダクションを運営している。……日本の場合は『浪漫の嵐』という名称で、総一や桜華もその例に漏れず、歌って踊れる男女混合ユニット

『ＢＬＯＳＳＯＭ』のメンバーとして所属していた。
しかし、総一は個人的に歌唱を苦手としていた。周囲の評価は低くないのだが、総一自身は身体を動かしている方が好きなのだ。振り付けをしつつ……となれば話は別なのだが、ただ歌うだけとなると一気に疲労が押し寄せる。
それでも事の重要性を理解しているので、基本的に真面目な総一は文句を言うことがあまりない。……以前に文句を言ったのは、する必要のない女装を強要されたときぐらいである。

「いよぅ！　お疲れだなぁ～大神ぃ～」

不意に背後から如何にも脳天気な声が掛けられた。振り向くまでもなく、総一は声の主が誰なのか分かった。
加山雄輔（かやまゆうすけ）。総一の幼馴染み兼親友兼悪友であり、諜報部隊の隊長であり、『ＢＬＯＳＳＯＭ』のメンバーでもある。
如何に疲れていても、誰かが近付けば流石に分かる。それでも声を掛けられるまで総一が気付かなかったのは、それだけ加山の隠形が見事であることを証明していた。

「ああ、疲れた。だから、悪いが今はお前の軽口に付き合ってやれんぞ？」
「ふむ、それは残念――――」

おちゃらけた様子でそう言ったかと思うと、次の瞬間には相変わった真面目な声で加山は言った。

「――――大神。つい先刻、ＩＳ学園の試験会場で何かが起こったらしい。これから調べに言ってくるが……俺の予想が正しければ事態は一気に動く」

まだ何が起こったのかは分からないらしいが、こういった場合の加山の直感はよく当たる。
それ則ち、『面倒事の到来』である。
予め覚悟を決めておけば、いざこの身に降りかかった場合でも割と冷静に対処することが可能になる。

「……そうか。情報、感謝する」
「いいってことよ。それじゃ大神、アディオ～ス！」

再度脳天気な声を発し、次の瞬間、加山は音もなくその場から姿を消した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……申し訳ありません。もう一度お願いできますか？」

加山より忠告を受けた、その数日後。
帝国華撃団司令室において、部屋の主たる司令よりある任務を告げられた総一は、そう問い返した。
内容を理解できなかったわけではない。寧ろこれ以上ないほどに理解できた。――しかし、だからこそ問い返さずにはいられなかった。
任務内容を簡単に言えば『ＩＳ学園に入学し、織斑一夏を護衛。場合によっては華撃団へスカウトし、他にも有益な人材がいた場合、その者もスカウトせよ』……と、こうである。
これは問い返さずにはいられない。
護衛だけならば、まぁ分からないでもない。平均的な同年代の者と比べれば、自分の方が遙かにデキると自認している。剣術も修めているし、霊的戦闘ではあるが実戦も経験している。極めつけに護衛対象と同性である。護衛のしやすさを考えれば、自分がその任に

就くのは妥当と言えるだろう。
分からないのは『ＩＳ学園に入学』の部分である。自分の歳を考えれば高校に通うのは問題ない。寧ろ普通である。――しかし、この部分だけは納得する事が出来ない。
織斑一夏という例外が現れたとは言え、ＩＳは未だ女性のモノだ。……平たく言えば『ＩＳ学園』は女子校なのである。そこにどうやって自分が通えというのだ。
華撃団は任務内容が内容なだけに、通常の軍隊――日本の場合は自衛隊――と比べてもその権限は遙かに大きい。普通に考えれば分かることだが、霊的存在に対して通常の武力など役に立たないからである。
故にその権限を用いれば通えなくもないだろうが、実行できなければ意味がない。
権限を使用できるのは、あくまでも『霊的存在が認められた場合のみ』なのである。――緊急事態においては独自の判断で使用することも出来るが、そんな緊急事態など滅多なことでは起こらないし、使用後に提出する書類の量がバカにならない。
そんなわけで、ＩＳ学園が実は『霊的現象を起こすことを目的とした秘密結社』でした……などといった場合でない限り、その権限は使用できないのだ。
より詳しく言えば、華撃団は秘密部隊であるために表立った階級はないが、それでも総一は平常時から少尉相当の権限を保有している。これでも充分と言えるが、霊的存在が絡んできた場合、脅威の度合いによって左官や将官までその権限が跳ね上がるのだ。
ともかく。
その事実を踏まえれば、今回の任務は自分より桜華向きである。世間における『ＩＳ学園』の立ち位置を鑑みれば、少尉相当の権限で出来ることなどたかが知れているはずだ。
また、大神総一と真宮寺桜華を比較した場合、性別の違いこそあれ、その腕前と実戦経験に大差はないという事実もある。

そして分からない点がもう一つ。織斑一夏のスカウトだ。……これは絶対ではないようだが、そこに至った経緯が見えてこない。

「うん……君の疑問はもっともだ。通常ならば桜華君の方に命じていただろう」

総一の疑問を汲み取っているのだろう。答える司令の声は柔らかかった。……元より『司令』という立場にしては柔らかい言葉を使う人物ではあるが、冷徹になるべきときはどこまでも冷徹になれる人物でもある。

それを踏まえた上でこういった言葉で返してくることを鑑みれば、真宮寺桜華ではなく大神総一でなければならない理由があるということだ。

そしてそれは、『当たれば儲け』的なモノではあるが、当たったときの配当が巨大であるという事実も示している。

「ＩＳ存在が今の世を形成することになったのは否定しない。……が、それも必要悪だ。……何故か？　かの兵器によって多大な技術革新がもたらされたのも、また事実であるからだ。無論、巨大な光は相応の闇を生むし、その点では見逃すことは出来ない。だが、それは何もＩＳに限ったことではない。今回はたまたま、ＩＳによる『技術革新』という名の光だった、という話でしかない。まぁ、如何に現行兵器を凌駕する威力を持っていようとも結局は物理兵器である、という点も我等がＩＳそれ自体をそこまで危険視していなかった一因だがね。……しかし、織斑一夏の存在がその認識を覆すこととなった」

総一は司令の言葉に同意する。少なくとも、華撃団員の認識は皆似たり寄ったりだった。

それをここに来て否定するに至った。そして、その原因となった

のが織斑一夏。先の命令と今回の言葉。そこから見えてくるモノは一体何だ？　――総一は思考する。
認識を覆された、と言っている以上、ＩＳは霊的脅威たりえるということだ。だが、真にそうであるならばもっと早くに発覚して然るべきである。しかし、織斑一夏が表立つまでそんな動きはなかった。
では、織斑一夏と他のＩＳ起動者の違いは何だ？　――織斑一夏は男性であり、他のＩＳ操縦者は皆女性だ。
そして、男性なら誰でも良いわけではなく、織斑一夏でなければならない理由がある。また、女性も起動確率が高いだけであり、その全員が起動できるわけではない。

（おいおい、ちょっと待て……。これは、どこかで聞いたような話じゃないか……？）

思考を重ね、総一はある結論へと行き着いた。
そもそも、総一が今ここでこうして話を聞いているのも強い霊力を保有しているからであり、大神家の実績によって十五の若さで隊長という任に就いているからである。
そうでなければ、『今ここでこうして話を聞いている』という事実は起こり得なかった。
そして、大神家の実績を語る上でも総一が華撃団にいる理由を語る上でも外せないのが霊子甲冑である。
霊子甲冑とは『霊力ありき』で開発されたパワードスーツだ。
時代の流れと共に使われる技術や形状は変化していったが『起動に強い霊力を必要とする』という点は今になっても変わりない。
そして一方のＩＳだ。
ＩＳのコアはブラックボックスそのものであり、開発者である篠ノ之束が発表した事柄以外は一切が不明。
そして篠ノ之束自身、『ＩＳの起動に何を必要とするのか分かっ

ていない』可能性が高い。……これは当初の発表から考える限り可能性は高いだろう。宇宙空間での活動、つまりは宇宙開発をするに当たって、女性しか動かせないのでは意味がない。

なのに発表したのは、篠ノ之束の認識では『男女とも動かせる』ことになっていたからではないだろうか。そして、ここで重要なのはあくまでも『篠ノ之束の認識である』という点だ。

篠ノ之束は自他共に認める天才だ。独力でＩＳなどというものを開発した以上、総一もその点に関しては認めている。

その一方で『自分の興味のないことにはとことん無関心』という話もある。この無関心は人間関係にも当て嵌まるらしく、自身の妹である篠ノ之箒、件の織斑一夏、その姉である織斑千冬くらいしか親しい人間はいないとも聞いている。

この、自分を含めたごく狭い範囲の四者に共通する部分があったなら、篠ノ之束は『人類全てに共通する』と認識するのではないだろうか。そして、ＩＳの起動にこの共通部分を必要としていたならばどうだろうか。

人類全てに共通するという認識ならば、わざわざその事について考える必要もなければ解明する必要もない。その結果として世間一般での認識が『ＩＳを起動できるのは女性のみ』になったとすれば……。

「ＩＳの起動には霊力が必要。……違いますか？」

自身の至った結論を、総一は司令へと確認した。……その声音は冷静そのものだが、表情まではそうはいかない。驚愕がありありと浮かべられていた。

「そう……君の驚き通りだよ。簡単にではあるが織斑一夏を調査した結果、彼が男性にしては珍しい霊力保有者であることが認められた。霊子甲冑の起動には至らぬものの、その霊力値は男性として充

分に高い。そしてそこから調べられる限りのＩＳ操縦者を調査した結果、保有量の差こそあるものの、その全員が霊力保有者であるという結果が出た。……無論、以前にもＩＳ操縦者を調査したことはあったし、霊力を保有しているという事実も判明してはいた。しかし、調査したのは五名にも満たず、対象が何れも女性であったために『賢人機関』はスルーしていたようだ。……華撃団の求める霊力値には遠く及ばないという事実もあったらしいけどね」

果たして、司令の答えは肯定であった。

それが真に事実ならば、この命令も納得がいく。

男の霊力保持者は貴重であるが、そこには確固とした理由が存在する。

そもそも、霊力それ自体は万能である、というのが通説だ。しかし、実際にそんなことはない。……何故ならば『発現形質』と『霊力性質』に左右されるためである。

炎、冷気、雷、或いは瞬間移動（テレポート）や治癒（ヒーリング）、身体強化などが発現形質に当たり、その分類は多岐に渡る。また、人によっては複数発現できたりするが、大抵の場合は一極特化である。

そして、個々の持つ霊力の特性を俗に霊力性質という。

今は紐育の華撃団戦闘部隊である『星組』隊長の任に就いている大河星司（たいがせいじ）と総一は、この霊力性質が特殊なのだ。

彼らの霊力性質は『触媒』である。その性質故に、彼らは他者と霊力を重ねることが出来るのだ。

譲渡であれば、他の隊員たちもやってやれないことはない。――しかし、相乗できるのは現時点において総一と星司だけなのだ。

この霊力性質は、文字通りの万能性を秘めている。そして、未だ男性にしか確認されていないのがポイントである。

現時点で織斑一夏をスカウトしたところで即戦力には成らないだろう。――しかし、その将来性は大きい。もし霊力性質が『触媒』だとするなら尚更だ。

だが、それも前提条件が間違っていなければの話である。総一がＩＳを起動することが出来なければ、この話は始まることなくそこで終わりだ。

「失礼します。打鉄を持って参りました」

当然、そのことは織り込み済みだったらしい。……まるでタイミングを図っていたかのように、量産型ＩＳの一つである打鉄が司令室へと運び込まれた。

「さて、論より証拠。早速確認してみるとしようか、総一君？」

「はっ」

司令に促され、総一は打鉄へと触れた。

「ぐぅ……っ！？」

瞬間、ナニカが繋がった。……それが総一の感想だった。

ＩＳに関するおびただしいまでの情報の数々が、意識へと直接流れ込んでくる。……その影で、己を見つめる存在がいることに総一は気付いた。

（何だ……？　俺を見ている……？　男？　それとも女？　……わからない。今はまだ、遠すぎる）

それは刹那の邂逅だった。――邂逅と言えるかもわからない。

次の瞬間、総一は我知らず打鉄を動かしていた。

「ふむ……どうやら推測は正しかったようだね」

司令の声に意識を浮かび上がらせた総一は、しゃがみ込んで打鉄を脱着した。……実に自然で、まるで『よく見知った物を扱っているかのよう』だった。
そして敬礼し、命令を復唱した。
「了解しました。大神総一、ＩＳ学園への入学、及び織斑一夏の護衛スカウトの任に当たります」
「うん……よろしく頼んだよ、大神隊長」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

神崎重工の技術者からＩＳについてのより詳しい話を聞いたり、ＩＳの参考書を読んだり、表向きの仕事をしたりしているうちにあっという間に日は流れた。

（まさか此程までに偏っているとはな。男性教諭が一人もいない。それも困るが、何よりも授業がＩＳ関連に偏りすぎだ。曲がりなりにも高校なのだから、これは問題がありすぎないか……？）

現在ＩＳ学園の廊下を歩きながら学校案内を読んだ総一の感想がこれだった。
こうして廊下を歩いている以上、ＩＳ学園への入学自体は問題なく出来た。――だが、ＩＳの動作に関して問題があった。
普通に動かす分には問題ないのだが、戦闘行動を取ろうとすれば上手く動かないのだ。
これは霊力が過剰注入されるためであろう、というのが総一の至った結論である。
霊力を動力源にしているところは同じだが、ＩＳと霊子甲冑の設計思想、設計理念は当然の如く異なっている。
霊子甲冑の場合は攻防移全てに霊力を用いるが、ＩＳの場合は防

――バリアーや絶対防御――だけらしいところを見てもそれは明らかだ。
無論、そのままでは問題があるので対策は練った。
それに実体験から、最適化（フィッティング）が進めば問題は解消される、と総一は踏んでいる。……初期設定時と一次移行（ファースト・シフト）後の動きを比べれば、そうとしか思えないのだ。
異例ながら発現した単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の存在が、その推測を後押ししてくれる。
もっとも、単体では何の意味もない能力だ。なにせその名前からしておかしい。『隊長』なのだ。その効果は、作戦を発令することによりＩＳの『コア・ネットワーク』においてチーム登録しているメンバー――自分を含む――の攻防移に補正を掛ける、である。……霊子甲冑で出撃しているときと然程変わりない。
そのことから鑑みても、後は時間の問題ということである。――しかし実際問題、その時間がどれくらいなのか分からないから困りものだ。

「まぁ、上手いこと立ち回ってみせるさ」

不利な状況など慣れたものだ。何せ霊的戦闘というものは基本的に後手に回るものなのだから……。
それを思えば、これもまた大差はあるまい。
総一には経験からくる自信と自負がある。
そして、たとえＩＳという未知の舞台といえど、それらの経験を転用できないはずはない。
それに、正直に言えば総一は楽しみだった。
総一はその仕事柄、普通の学校に通うことなど出来なかったのだ。今までの勉強は全て華撃団の関係者に教わってきたのである。
つまり何が言いたいのかといえば、総一は同年代との付き合いに飢えているのだ。同年代の友人など華撃団の関係者ぐらいで、それ

以外は仕事上のドライな関係でしかないのである。
ＩＳ学園も決して『普通の学校』とは言えないが、それでも学校であることに変わりない。
この年齢になっての学校デビューであることも相俟って、総一は心底から『友達百人』をつくる気である。
そうして、総一は意気揚々と教室に入っていった。

プロローグ（後書き）

一話当たり何文字くらいが妥当なんでしょうか……？
自分の場合、最低五千字は突破するようにしているのですが……。
お教えいただければ執筆の目安になるので助かります。

第1話

「いよいよですか……」

そう呟いたのは、鮮やかな金髪が映える青眼の少女であった。名はセシリア・オルコット。ＩＳ学園の新入生である。

日本に来るにあたり、セシリアにはある目的があった。

イギリスの代表候補生という立場にある以上、ＩＳの操作能力向上とブルーティアーズのデータ取りが第一であることに違いはない。そのためにＩＳ学園に通うことを選んだのだし、余儀なくされたのだから。

しかし、それはあくまで公人としての目的だ。――私人としての目的は他にある。

私人、セシリア・オルコットの目的。それは『ある男にもう一度会う』ことである。

だが、ただ会うだけでは意味がない。会うべくして会う必要があるのだ。――でなければ、名前も居場所も知っている以上、既に会いに行っている。

初めての出会いは偶然の産物だった。……ならば、その男に会うのは次も偶然の産物によるものでなくてはならないのだ。

あの男は自分の慢心を打ち砕いてくれた。――だから、その点には感謝している。

しかしそれと同時に、自分のプライドをも打ち砕いてくれたのだ。――だから、その点に関しては恨んでも仕方ないだろう。

あの男に抱いたのが感謝の念だけだったならば、素直に会いに行っている。――しかしそうでない以上、自分から会いに行くのは我慢がならない。

そう、『偶然に次ぐ偶然』という過程を経て、今度こそ自らの言葉で己の名をあの男に刻み込み、そしてその次には『必然』として

出逢えるようにする。……それこそが、私人、セシリア・オルコットの現時点における最終的な目的だ。

「さぁ、待っていなさい。わたくしは必ず目的を果たしてみせますわ。そのために必要だというのであれば、運さえも味方に付けて差し上げましょう……！」

言葉にすることで、今一度意志を確かなものとする。……セシリア・オルコットは静かに気炎を上げた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

不意に、ゾクリときた。

それを表に出すことなく、総一は静かに警戒を強めた。

霊能者であり剣術家でもある総一にとって、この手の感覚は慣れ親しんだものだった。もっとも、事が実際に起こったとて、その脅威度は千差万別であったが……。

（さて、当たりか外れか……）

視界内に織斑一夏の姿を認め、総一は心中で呟いた。

華撃団の存在を知っている政治家の中にも、当然の如くその役目を疑問視する者はいる。何せ時勢が時勢だ。『そんな曖昧なものに注ぎ込む金があるのなら、その分を新たなＩＳの開発に回すべきではないのか』……といった考えを持つ者がいるのは至極妥当であるだろう。――実際に霊的現象に対処している総一としては困りものだが。

ともあれ。

そういった考えの者たちに華撃団の有意性を示すためにも、此度の護衛任務はありがたかった。そういった考えの者たちは、華撃団

の実戦部隊を『強い霊力保持者の集まり』としか認識していないからである。
確かにそれも間違ってはいないが、あくまでそれは最低限の条件である。実際に配属されている隊員の多くは、何かしらの戦闘技術を修めていたり、そうでなくても優れた能力を持ち合わせている。事実、総一は二天一流を修めているし、桜華は北辰一刀流を修めている。
そこで重要となってくるのが織斑一夏である。『世界で唯一ＩＳを動かせる男』という肩書きは強い関心を引き寄せている。――実際には総一も動かせるので唯一ではないのだが。
華撃団の上層部である『賢人機関』、技術協力している『神崎重工』の上役たちは『ＩＳを起動させるには霊力が必要』という結論に至っているが、世間一般には謎のままである現状、織斑一夏はあらゆる意味で狙われやすい。
織斑一夏を『世の男性にとって希望の星』と表せば分かりやすいだろうか。
表向きには技術的な意味で狙われやすい。現在判明しているあらゆるデータとこれから取得できるであろうデータを女性のそれと比較することで、『男なのにＩＳを動かせる理由』が判明するかもしれないのだ。
そして女尊男卑を招く要因がＩＳにある以上、それが分かれば男女平等にまで持ち直せるかもしれないのだ。
これは大きい。仮に科学的な理由を証明できたならば、それを発表した国は世の男性陣からの多大な支持を得られることだろう。
そして、だからこそ大半の国が身柄を確保しようとしているはずだ。
確かに、ＩＳ学園は国際規約で『学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない』と定められている。――がしかし、今現在そんなものは既に有名無実の代物と化している。

故に、今こうしている中でも、あらゆる国家あらゆる組織が動いている筈だ。
結婚などで合理的に確保しようとする分には何も問題ない――わけではないが、結婚は個人の問題であるために口出しし辛い――が、それに紛れて秘密裏に確保しようとする所も間違いなく存在しているだろう。
そして裏向きには『世界を絶望で満たす』ために狙われるだろう。
得た希望が容易く無へと帰したならば、後に待つのは絶望だ。
世界の男女比はおおよそ半々。その内の半分が一斉に絶望の海へと沈むのだ。
霊的見地に立つ者としては、その後に起こることなど考えたくもない。文字通りに世界が滅んでも不思議ではないだろう。
故に、織斑一夏を見事に護ってみせれば、華撃団を疑問視する政治家たちに『華撃団は役に立つ』と考え直させることが出来るはずだし、起こり得る災厄を未然に防ぐことにも繋がるはずなのだ。
そんなわけで、このような悪寒が起こるのは、総一にとって寧ろ望むところであった。

（しかしまぁ、彼も災難な事だ……）

警戒はそのまま、総一は護衛対象に同情せざるを得なかった。
織斑一夏にとって――大神（じぶん）総一を除き――周りの人間は全部女性。しかも席は最前列の中央……つまりは教卓の真ん前という最も目立つ位置。挙げ句の果てには向けられる視線の数々。
見ていて可哀想になるほど緊張しているのが丸わかりだ。
男という点で見れば総一も同じであるが、彼の席は最後列だ。それに加えて、興味本位で眺めるだけならわざわざ後ろを向くよりも前や横を見た方が楽なためか、総一に向けられる視線は想像以上に少ない。
だからこそ、総一には同情を抱くような余裕があった。

（ＨＲまでまだ時間はある。……休み時間を予定していたが、今の内に話しておくか）

総一は席を立ち、静かに、それでいて自然に、一夏の席へと向かっていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「いや、君も大変だな。織斑一夏君？」

自分に掛けられたその声に対し、何よりもまず『助かった』と一夏は思った。

女性の群れの中に男子は自分一人だけという事実もあり、一夏としても覚悟は決めてきたつもりだった。――しかし、所詮は『つもり』でしかなかったということだろう。これは想像以上にキツかった。

一応『ＨＲ直前に入室していらなく目立つ真似をするよりは、前もって入っていた方がマシだろう』という考えの元に早めに来たのだが、いつまで経っても視線の雨は止まない。

いい加減にどうにかなるんじゃないかと思ったところで、救いの主が現れたのだ。

誰かと会話でもしていた方が時間の経ち具合も早く感じられるだろう、と自分でも思っていたのだが、助けを求めた先――幼馴染みの少女である篠ノ之箒――に無視を決め込まれて諦めていたところでこれだ。その喜びも一入（ひとしお）である。

（ああ……神様って本当にいるんだな。神様ありがとう）

思わず神様に感謝を捧げてしまったが、声を掛けられて何の返事

もしないのは失礼だ、と返事を返そうとしたところで何かが引っ掛かった。
何だ――――
「もしもし？　聞こえているかい、織斑君？」
――――と思ったところで再度声が掛けられ、直ぐに答えが出た。声が低い。声が低い女性もいるだろうが、この低さは男性のそれだ。
その答えが出ると同時、ぐるん、と勢いよく一夏は声の主へと振り向いた。
果たして、声の主は男だった。充分に美形と言える顔立ちは微苦笑を浮かべている。しかし、何よりも一夏の目を惹いたのはその佇まいだった。凛としている、と言えばいいのだろうか。ただ立っているだけだというのに、美しさと力強さを感じさせてならない。
「あ、ああ……聞こえている。悪い。男は俺一人だって聞いてたから、驚いて反応が止まってた」
「まぁ無理もないさ。俺は他人から視線を向けられることには慣れてる方だけど、それでもこれは結構くるものがある。……取り敢えず自己紹介といこう。俺は大神総一だ。君と同じく『男なのにＩＳを動かせた』ってことでこの学園に通うことになった。動かせた理由は……有り体に言えば偶然の産物だな。『ＢＬＯＳＳＯＭ』ってグループは知ってるかい？　俺はその一員なんだけど、メンバーの一人がＩＳを題材にしたドラマに出ててね。俺もそれに急遽端役で出ることになったんだ。まぁ撮影自体はすんなり終わったんだけど、事が起こったのはその後だ。片付けを手伝ったときに偶然ＩＳに触れたんだが、そしたら何の因果が起動したってわけだ」
流石に真実を言うわけにもいかず、表向きの理由（カバーストーリー）を言って総一は

笑った。
なるほど。芸能界のことなどサッパリだがそういうこともあるだろう。――総一の説明に一夏は納得した。
しかし、同時にこうも感じた。『本当のことを言っているが――真実は語っていない』……と。
何故そう感じたのかは一夏自身にも分からない。本当にただの直感だ。けれど別に構わなかった。
これもまた直感でしかないが、総一（コイツ）は信じられる、と一夏は感じたからだ。
そんなわけで一夏もまた自己紹介をしようとしたところで――――

「きゃあああああ！」
「まさかとは思ってたけど！」
「本当に『ＢＬＯＳＳＯＭ』の総一君！？」
「サインちょーだーい！」

――――爆発と言わんばかりに周りの女子が騒ぎ出した。
それから暫し。
総一の自己紹介に周囲の女生徒たちが騒ぎ出し、結局一夏が総一に自己紹介することなくＨＲが始まった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

（これは……別の意味でキツい）

一夏は心中で呻いた。――出席番号順での自己紹介。……それはいい。別に構わない。進級に伴うクラス替えがあるかは分からないが、少なくとも一年間は一緒に勉強することになるのだ。自席の周りや気になる人物を確認する意味合いでも、自己紹介というものは必要だ。しかし、この歓声は一体何だ。自己紹介でこんな歓声が上

がるものなのか。というか、他のクラスに迷惑だろう。
ＨＲ前と同じく、総一が自己紹介した途端にこの騒ぎである。
少なくとも、この騒ぎが治まるまでは一夏が自己紹介する意味がない。こんな状態で行ったところで、騒ぎに呑まれてお終いである。

（だからこそ、こうして考えてられる余裕があるんだが……）

しかしそれも長くは保つまい。程なく自分の番がやってくる。その時、自分はどのように自己紹介をすればいいのだ。……よく知らないが、総一は有名人らしい。所謂『芸能人』というやつだ。この騒ぎはそれも一因なのだろうが、何よりも総一の自己紹介の上手さが理由だろう。この衆人環視の中で、彼は如才なくやってのけたのである。真似しようにも、とてもじゃないが無理である。ひょんな事から有名人になってしまったが、そこに自分の意志は介在していないのだ。結局のところ何が言いたいのかといえば、『周りがどう思おうとも織斑（じぶん）一夏は平々凡々な小市民である』ということだ。

（そんな俺が、どうやったら自己紹介を上手くやれるってんだよ……！？）

一夏が心中で絶叫している間にも周囲には静寂が戻りつつある。いや、戻った。それと同時に、幾多もの視線が自分に向けられる。

（えーい、こうなったらヤケだ……！　やってやる！　やってやるよ！）

自分に克を入れ、勢いのままに口を開く。

「名前は織斑一夏。皆がどう思ってるか知らないけど俺はしがない小市民なんでムダに何かを期待するのは止めてくれ。ただ掃除洗濯

に関しては一日の長があると自分でも思ってるからそこら辺は頼ってくれても構わない。まぁ何はともあれここに通うことになった以上最初は不慣れもあると思うが皆と仲良くやっていきたいと思う。どうかよろしく」

一夏はノーブレスで言い切り着席した。――自分でも何を言ったか曖昧だ。変なことを言ってなければいいんだが……。

少しばかり余裕が戻ってきてから気付いたが、周囲は未だにしんとしている。どうやら呆気に取られているようだ。――一夏が思い至った途端に後方からパチパチという音が鳴った。

振り向く。視線の先では大神総一（ごどうるい）がその手を叩き合わせていた。

「フム……まぁ良しとしておいてやろう」

それを確認したと同時、またも自分の後方――副担任である山田先生がいた場所、つまりは教壇――から、今度は声が聞こえてきた。しかし、山田先生の声ではない。

一夏はその声に聞き覚えがあった。――いや、そんなレベルじゃない。よく知っている声だ。この『俺にのみドラの効果音付きで聞こえてくる、トーンの低い声』は、自身の姉、織斑千冬のものに他ならない。

至った結論に対し、そんなバカな……、と思いつつ、一夏は――まるで錆び付いたロボットの如く――ゆっくりと振り向いた。

黒のスーツにタイトスカート。その背はすらりと高く、ボディラインは見事の一言。胸の前で組まれた腕。その鋭い目つきは、まるで狼を思わせる。……思い違いでも見間違えでもなく、正真正銘、織斑千冬（じぶんのあね）がそこにいた。

「な、んで……？」

何でここに千冬姉がいるんだ？　――そう問い掛けようとした一夏の声は、しかし言葉として機能しなかった。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

目の前で交わされる会話に一夏は理解が追いつかない。だが、そんな一夏をお構いなしに状況はどんどんと進んでいく。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らうのは個人の自由だが、私の言うことには従え。いいな」

千冬の自己紹介はこれ以上ない暴力宣言と同義だった。しかし、その言葉は一夏を落ち着かせる効果を果たした。

この『目の前に織斑千冬がいる』という現実を、ただただ一夏に納得させたのだ。織斑千冬（じぶんのあね）の理不尽さをこれ以上ないほどに知っている一夏にすれば、諦観（こんなこと）を抱くのは慣れたものだったのである。

だが、一夏のテンションと周りのテンションはどうやら違うらしい。総一のときよりもなお凄まじい黄色い声が教室の中を飛び回っている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

心底うっとうしいという表情で千冬は毒を吐く。だというのに、女生徒の黄色い声は止まない。

「あーもうやかましい。いい加減に黙れ。騒ぎたりないんならグラウンドを十周でもしてこい」

その言葉と共に、教室内からはピタリと音が止んだ。……先程までの喧騒が嘘のようである。

「初めからそうしていろバカどもが……。そら、時間は押してるんだ。次の奴、とっとと自己紹介をしろ」

千冬効果は絶大ということなのだろうか。そこからは順調に自己紹介が進められていった。

第2話

（さて、どうしたものかな……？）

一時間目の休み時間、総一は行動を決めかねていた。

視線の先では、ある女子生徒が護衛対象へと声を掛けている。

篠ノ之箒。織斑一夏の幼馴染みにして、ＩＳの開発者、篠ノ之束の妹。

四方八方から見られているこんな状況では、落ち着いて話をすることなど出来るわけがない。……少なくとも、加山の情報を信じる限り篠ノ之箒には無理なはずだ。

となれば、必然的にどこかへと移動するだろう。

護衛としては付いていくのが正しいのだが、総一とて情を知る人間である。

久方ぶりの再会、その上に篠ノ之箒の事情も鑑みれば、邪魔をしたくないと思うのが人情というものだ。

（とは言え、目を離すわけにもいかないからな……。仕方ない。遠目に窺うくらいは許されるだろう……）

二人が席から離れたのを見計らい、気落ちしながらもごく自然に総一は起立する。

「少々、よろしいでしょうか？」

「……ええ。とは言え、ここではなんです。教室から離れませんか？」

「構いませんわ」

「では、少々歩くとしましょう」

横合いから掛けられた声に、総一の反応は僅かに遅れた。
知人である。――同じクラスにいることは分かっていたが、話し掛けられるとは思ってもみなかったのだ。
だが、これ幸いと総一は話し掛けてきた人物――セシリア・オルコットを誘導する。……こんな状況だ。教室の外へと誘うのは何らおかしな事ではない。

「しかし、まさか話し掛けられるとは思っていませんでしたので……少々、驚きました」

視界の中に一夏と箒の姿を確認し、廊下を歩きながらも総一はセシリアへと告げた。

「……無理もありませんわね。お恥ずかしい話ですが、あの時のわたくしは、ただ『男』というだけで見下しておりましたから……。言い訳にしかなりませんが、やはり重圧（プレッシャー）やストレスに参っていたのでしょうね。オルコット家を継いでから……つまりはたった三年会わなかっただけで、幼き頃よりの親友が男だということすら忘れておりましたもの。その事実に気が付いたときは愕然としてしまいましたわ」

そう言って、セシリアは静かに笑った。
いい笑顔だ、と総一は素直にそう思った。
セシリアとの出会いは、以前、総一が仕事で欧州へ赴いた際に遡る。
全てではないにしろ、代表候補生ともなれば国内に限っては相応の知名度を有しているものだ。それ故に、メディアへ出てくることも少なくはない。
セシリアの場合は、見目麗しく、名門貴族である『オルコット家』の当主という追加要素もある。メディアへの露出は必然と言えた。

さて、欧州にはある実話を元にした物語が存在している。その起源は新しめで、日本でいえば太正時代に当たると言われている。

主人公は日本よりやって来た黒髪の男。ヒロインは五名で、その内訳は修道女、貴族の娘が二名、サーカス団の少女、世間を騒がせた大悪党となっている。……この六名が舞台となるパリの地で次から次へと起こる怪事件を解決していく、というお話だ。

そのタイトルを『黒髪の貴公子』というこの物語は、欧州全域で多大な人気を博している。――しかし細部は非常に不鮮明で、ハッキリしていることなど紹介文に書かれてていることくらいしかない。

だが、主人公とヒロインの名前も不明だからこそ自由度が高く色々なストーリーが創られており、そうして創られたストーリーが或いは加えられ或いは削られていったからこその人気である、とも言われている。

今までにも何度か映像化されている『黒髪の貴公子』だが、またもや映像化する運びとなった。いつもと違うのは『主人公には黒髪の日本人を起用したい』という監督の強い拘りが反映されたことである。

そこでスポットを当てられたのが総一だ。

総一の聞いたところによると、当初『若い』という理由で監督は却下したかったようだが、スポンサーの面々――フランスの名門貴族であるブルーメール家、北大路（きたおおじ）家、シャトーブリアン家、ライラック家、更には欧州全域にその名を轟かせるホワード技研、果てはイタリアでも屈指の名門、『赤い貴族』と謳われるソレッタ家と錚々たる顔触れだ――からの強い推薦に断り切れなかったとの事である。

まぁ、実際に動きを見せた後は両手を挙げて歓迎されたのだが……。

ともあれ、主人公が若いのでヒロインの年頃もそれに合わせ、ヒロインの一人である『貴族の娘』としてセシリアが選ばれた。

この共演が二人の出会いである。

そして当時、総一はセシリアからどこか張り詰めた空気を感じていた。それをどうにかしたくて話し掛けたり料理を作ったりと色々やってみたわけだが、結果は芳しいものではなかった。
しかしそれがどうだ。今のセシリアは自然体であるように見受けられる。
自分にはどうすることも出来なかったが、良い方向へと向き直ってくれたのは素直に嬉しいことである。
歩きながら話を聞いている内に廊下は抜けていた。
降り注ぐ陽の光と肌を撫でる風が心地よい。

「なので大神さん、わたくしはあなたに感謝しておりますのよ？あの時、あなたの剣を見ていなければ……今もきっと、わたくしは慢心したままだったでしょうからね。……ええ、ですから、ありがとうございました」

そう言って、セシリアは総一へと頭を下げた。そこにわだかまりは感じられない。少なくともセシリアにとって、この件で総一に頭を下げるのは前々から決めていたことであり、何ら厭うことはない。
その一方で、頭を下げられた総一としては堪ったものではない。総一個人がセシリアに行ったことで感謝を受けるのならば、それはそれで問題なく受け止めることが出来る。――しかし、セシリアの言葉を聞く限りではどうも違うようだ。
セシリアは『剣を見て』と言った。総一が覚えている限り、セシリアの前で剣を抜いたことは一度もない。となれば、セシリアが言っているのは撮影時、或いは自己鍛錬をしている時のことだろう。……どちらにせよ、総一自身の意図はない。
撮影時のことを言っているのであれば、それは仕事だからだ。公人としても私人としても全力で臨んだが、それでセシリアに対してどうこうという意志は微塵もなかった。
自己鍛錬にしても同じ事だ。打ち合う相手がいない以上、それま

で疎かにするわけにはいかないというだけのこと。やはりセシリアに対してどうこうという意志は持ち合わせていなかった。
だからこそ、こうして頭を下げられるのは非常に困る。総一の意図するところではないにせよ、総一が影響を与えたという点では間違いがないから尚更だ。

「……頭を上げて下さい。俺個人としては、あなたに何かをしてやれたという実感がないのです。無論、俺個人の感情は別として、感謝の念はありがたく頂戴します。それを固辞するのは、あなたを侮辱する行為に他なりませんからね。……しかし、身に覚えのないことで頭を下げられるのは、その、どうにも心苦しいのです。ですので、こちらを助けると思って頭を上げてくださいませんか？」

総一は困惑を隠しきれないままにそう言った。
これが加山や桜華相手であれば、もっとざっくばらんに言っているのだが、彼らとセシリアの立ち位置は違うのだ。
これが公人として礼を言っているのであれば、ＩＳの先輩ということで下手に出るのも吝かではない。――だが、今回の彼女は私人として礼を言っている、と総一は受け取った。
その点を加味すれば、上から言うのもダメだし、下手に出すぎるのも良くはない。……総一にとっては何とも難しい話である。
正直、この対応で合っているかどうか自信がなかった。

「……では――――」

と言ってセシリアは頭を上げた。
それに総一はホッと息を吐く――事は出来なかった。……セシリアの纏う空気が一変していたからである。

「――――次の話へと移らせていただきますわね？　率直に言えば、

わたくし、負けず嫌いなんですの。……で、ですね？　あなたは確かにわたくしの慢心を打ち砕いてくださいましたが……それと同時にわたくしのプライドをも粉微塵に打ち砕いてくださいましたの。となれば……これはリベンジするしかないでしょう？」

そう言ってセシリアは嗤う。

ゾクリ、と総一の全身を怖気が走った。それと同時に、ＨＲ前に感じた悪寒の正体に気が付いた。

これはマズい。何をしたのかは皆目見当も付かないが、この空気は桜華やシャルロットを始め、女性陣を怒らせた際のそれと同質のものだ。

（くっ……俺はどうすればいい。俺に一体何が出来る。……教えてくれ、そして助けてくれリヴァイアス！）

空気に耐えきれず、総一は遠きパリの地にいる親友にしてシャルロットの義兄、リヴァイアスへと心の中で助けを求めた。……現実逃避とも言う。

総一の経験上、このテの空気を纏った女性は厄介事しか運んでこないのだ。

「……俺に、一体何を望んでいるんだ、セシリア・オルコット？」

絞り出すように総一は言った。……最早、言葉を取り繕う余裕など持ち合わせていなかった。

「今は秘密とさせていただきますわ。まだ準備が整っておりませんので……。大丈夫ですわ。それほど時間は掛からないはずですから……」

「……了解した。皆目見当もつかないが、俺に非があるのは間違い

ないようだしな……。何であれ、甘んじて受け入れるとしよう」

諦観の念を抱いた総一が言うと同時、二時間目の開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

「それでは戻りましょうか」

颯爽と歩み去るセシリアを追い、総一もまた歩き出した。……一夏もまた箒の後を追っているのが、視界の端に微かに見えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ほとんど全部わかりません」

二時間目の授業中、『わからないところがあったら訊いてくださいね』との山田先生の言葉に対する一夏の返答がこれであった。

その言葉を受けた山田先生の態度が一転し――先程まで胸を張っていた――思いっきり顔を引き攣らせたのが、総一の目にハッキリと映った。

山田先生がそうなるのも無理はない。

総一とてそこまでＩＳのことが分かるわけではないが、それでも今授業でやっていることぐらいは分かる。

ＩＳ学園に入るに当たり、事前に参考書には目を通しているし、技術者の方からも説明を受けたからだ。……当初、件の参考書がやたらと分厚いことにげんなりとしたが、その実わかりやすく纏められており、スイスイとページを進めたのは記憶に新しい。

そして、今日は初日で今の授業は二時間目だ。……つまり、今やっているのは『初歩の初歩』という事である。

それを『わからない』と言われてしまえば、教師としては困りものだろう。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

それでも、何とか気を取り直したらしい真耶が確認を取る。……当然の如く、誰一人として手を挙げる者はいなかった。

「な……！？　大神、まさかお前もわかるっていうのか！？」

それを見た一夏が驚愕も露わに総一へと問い掛けた。

「いや、俺からすればこの時点で『わからない』っていうのがわからないんだが……？　確かに仕事の関係もあって参考書にも全部目を通したわけじゃないが、今やっているのは最初の方に載ってたぞ？　しかも結構わかりやすかったし……。織斑君も大変だったとは思うけど、俺ほど時間が取れないわけじゃなかったと思うんだが……？　仮に参考書に目を通していなくても、政府から教育役が派遣されているはずだ。何せこの学園はそのシステム上、事前学習が欠かせない。しかしＩＳの特性上、余程の物好きでなければ男にそれは望めない。こういう言い方はアレだが、俺や君は世の男性陣にとって『希望の星』なんだ。そして自発的な協力が得られれば、データ取りであれ研究であれ進展が早くなる。そこを踏まえれば、参考書だけ渡して『入学までに勉強しておいて下さい』なんて有り得ないんだ。事実、俺に対しても技術者が派遣されてきたし、その技術者は『織斑先生が君の教育役』だと零していたんだが……？」

困惑しつつ、総一はそう返した。……寧ろ、そうとしか返せなかった。

「そうなのか？　俺は千冬姉がこの学園で教師をしていることすら、

今さっきまで知らなかったんだが……」

総一の疑問に一夏はそう答え、その視線を千冬へと移す。……一夏だけではなく、教室中の視線が千冬へと突き刺さった。

「ゴホン……織斑、貴様ＩＳの参考書はどうした？」

「実は……家の掃除をしたときに古い電話帳と間違えて捨ててしまいました」

「やれやれ……仕方ない。あとで再発行してやるから目を通しておけ」

千冬はそう言って山田先生に授業を進めるように指示した。この対応は、先程までの千冬の態度からは考えられないものである。

故に、それを見ていた一同の心は一致した。……則ち『誤魔化した！』である。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

二時間目の休み時間、不意に声を掛けられた一夏は素っ頓狂な声を出した。

鮮やかな金髪が映える青眼の少女。美少女と評するに充分だが、その言葉遣いといい纏っている雰囲気といい、『いかにも』今時の女子だ、と一夏は思った。

「もしもし？　聞こえてます？」

「あ、ああ……聞こえてる。どういう用件だ？」

「いえ、特に用という用はございませんわ。……ただ、他者を知ろ

うと思うのなら、まずは実際に話してみるのが一番でしょう？　あなたはそう思いませんか？」

同意を求められた一夏は、確かに、と肯定した。

それと同時に己を恥じた。自分は第一印象で決めて掛かられるのを嫌がっているというのに、『他ならぬ自分が第一印象で決めて掛かっていた』という事実が自己嫌悪を呼び起こす。

「悪い。俺、第一印象であんたの事を決めて掛かっちまってた」

だからこそ、一夏は頭を下げた。……目の前の人物には困りものだろうが、こうでもしないと自分のスジが通せない。

「くぅ……っ！　彼もこんな気持ちだったのかしら……？」

いきなり頭を下げられた当の本人、セシリア・オルコットは困惑し、つい一時間ほど前に自分が頭を下げた相手もこんな感じだったのだろうか、と思考した。……それが言葉として零れていることに気付かぬままに。

「あ～もう！　とにかく頭を上げてくださいな！　いきなり頭を下げられては、わたくしの方が困ってしまいますわ！」

ついセシリアは怒鳴ってしまった。別に怒ってはいないのだが、こんなのは彼女にとっても予想外である。……どちらかと言えば直情径行気味な彼女はイレギュラーに弱かった。

「あ、その、悪い……」

「いえ、わたくしも怒鳴ってしまいましたから……」

一夏が頭を上げたかと思えば、今度はセシリアが頭を下げた。
暫しの後、二人揃って小さく笑う。
奇妙な静寂が教室内を包んだ。――寧ろ、二人の周りに独特の空気が形成された、と言った方が正しかろう。
当然、そんな空気を許容できない者がいた。
篠ノ之箒である。
彼女は一夏に恋をしている。そして、これ以上ないくらいの焼き餅焼きであった。ついでに言えば『素直になれない』病の持ち主で、加山曰く『ツンツンツンデレ』である。
箒は正当な――一夏にとっては不当である――怒りをぶつけようと席を立った。そして一歩目を踏み出すと同時にそれが鳴り響いた。
三時間目の開始を告げるチャイムである。……あぁ、無情。
箒は怒りを抑え込んで席に着いた。

第3話

「この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する。――が、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

三時間目。教壇に立ったのはこれまでと違い山田先生ではなく織斑千冬であり、その第一声がこれだった。

その言葉を聞き、総一は教師としての織斑千冬に疑問を抱いた。

確かにクラス代表者を決めるのも必要だろうが、何も授業中に行うことはない。それこそ下校時のＨＲで行えば済むことだ。

なるほど。確かに織斑千冬は優れたＩＳ操縦者なのだろう。……それは総一も認めるところだ。

しかし、それが優れた教育者とイコールで結ばれるとは限らない。

千冬の場合、その言動から鑑みるに軍隊の教官などであれば適正は抜群だろうが、教師としての適正は然程高くない。……総一はそう見て取った。

（織斑一夏への事前指導も行っていないようだし、ここの上層部は一体何を考えているんだ……？）

「はい！　織斑君を推薦します！」

「私は総一君を推薦します！」

（ん？　今名前を呼ばれたようだが、一体何だ……？）

考え事に没頭していた総一は己の名前を呼ばれたことで我に返り、情報を得ようと耳を立てた。

「では候補者は織斑一夏と大神総一。……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

代表者の選出か、と千冬の言葉を聞いて理解した。

代表者とはクラスの顔だ。それが周囲に埋没するようでは意味がない、と考えるのも道理ではある。そしてこのクラスには打って付けの客寄せパンダが二名存在しているとなれば、それが選ばれるのは自明の理だ。――だが、クラスの顔というのならば専用機持ちで充分に事足りる、というのが総一の考えである。

「では、俺はセシリア・オルコットさんを推薦します」

総一の言葉が、教室内に静かな波紋を呼び起こした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「さて、それじゃあ帰ろうか、織斑君？」

放課後。唸る一夏にそう声を掛けたのは総一である。――しかし、誘われた一夏としては意味がわからない。

「いや、帰るってどこにだよ？　俺は一週間は自宅通学なんだが？」

「……それも聞いてないのかい？　俺という二人目が現れた事で、部屋の問題は解決しているんだけど……」

首を傾げて問う一夏に、総一は深い溜息を吐いて答えた。

当然、わからないのは一夏である。そんな話は聞いていない。

「はぁ？　それって一体どういうことだよ？」

「そうだな……？　ＩＳ学園は全寮制で、基本的に相部屋とされて

いる。……ここまではいいかい？」
「ああ。だから『男の俺を迂闊に放り込むわけにはいかない』ってんで、少なくとも一週間は自宅通学って聞いてたんだが？」
「そう、そこだ。君が男で、同室の子が女子だから問題となるんだ。だから時間を掛けて君用の部屋を用意しなければならなかった。――けど、俺という二人目の男が現れた。……なら、俺と君を同室にしてしまえば問題はない。わざわざ時間を掛けて個室を用意する必要もない」

言われてみれば納得である。
しかし、一夏としてはこう言わずにはいられなかった。

「なぁ……俺っておざなりにされてんのかな？」
「……」

否定したくても否定できず、総一は沈黙を以て答えるしかなかった。
総一の沈黙に、やっぱそうなんだな、と一夏は首をガックリと落とした。
自宅通学する必要が無くなったのは、まぁありがたいといえばありがたい。――しかし、荷物は家に置いてあるのだ。これでは二度手間である。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」
「山田先生……？　一体どうしたんですか？　そんなに息を切らせて」
呼ばれた声に一夏が振り向くと、そこには息を切らせた山田先生がいた。その手には何らかの書類を持っているのが見て取れた。

「えっとですね、連絡が遅れてしまったんですが織斑くんの部屋が用意されてます。当初の予定と違い大神くんと相部屋となってしまいますが……。あ、こっちの紙が部屋番号で、これが部屋のキーになります」
「ああ、それについては今し方大神から聞かされたところです。キーと紙についてもありがたく受け取っておきます。……それで、用件はそれだけですか？　さっさと家に荷物を取りに行かなくちゃならないんですが？」

山田先生が言いつつ、紙とキーを渡してきた。それを受け取りつつも、一夏の言葉は自然と荒くなった。山田先生が悪いわけではないとわかってはいるが、こうも後手後手に回されてしまっては感情を抑えきれなかった。

「あぅ……それに関しては本当に申し訳ないです。それで荷物についてなんですが――――」
「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え。まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があれば問題ないだろう」

山田先生の言葉を千冬の言葉が遮った。
千冬のジャイアニズムに関しては諦めのついている一夏である。特に口答えする気も湧かなかった。――しかし、意外な人物が否を唱えた。

「織斑先生は黙っていてください！」

山田先生である。今日一日の態度が態度だっただけに、こうもビシッと言い放つとは思ってもみなかった。……そう思うのは他の面々も同じだったようである。一夏と総一のみならず、教室に残っていた他の生徒や千冬までもが驚きの表情を浮かべていた。

「もう、何なんですか、織斑先生！　事前説明を行ってなければ事前指導も行っていない。挙げ句の果てには連絡の不徹底！　確かに織斑くんは織斑先生の弟さんかもしれませんが、それでも限度というものがあります！　しかも、それに対して織斑くんに謝るでもなく上から目線のそのセリフ！　もっと言わせてもらえば生徒に対する口が悪すぎます！　ここは確かに特殊な学園ですが、それでも対外的には『高校』を謳っているんです！　教育委員会から文句が来たらどうするんですか！　だいたいですね……」

その勢いは、正に一気呵成と評するのが相応しかった。

よく『普段大人しい奴ほど怒らせると怖い』と言われているが、目の前の光景はそれを証明しているようだった。

そしてその光景は、一夏にとってひどく新鮮に映った。何せあの織斑千冬がタジタジなのである。

「まぁ、忙しそうだし……俺たちはお暇するとしよう」

「……そうだな」

これ以上この場にいても、二人に出来ることは何もない。

「それでは失礼します」

異口同音に言い放ち、総一と一夏は教室から去っていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

校舎から寮までは五十メートルくらいしかない。色々と見て回るべき施設や設備はあるが、何も急ぐ必要はない、という点で両者の意見は合致した。

折り合えずは人心地つくのが先決である。
おのぼりさんよろしくキョロキョロと周囲に視線をやりながらも、その足は真っ直ぐに自室への道を歩んでいる。
普通に歩くよりは時間が掛かったが、それでも必要以上に時間を取られることもなく二人は自室へ辿り着いた。

「改めて……これからよろしく、織斑君」
「ああ、よろしくな。それと、俺のことは名前の呼び捨てで構わないぜ。名字だと千冬姉と被るし、同い年の奴から君付けで呼ばれるとこそばゆくて仕方ないからな」
「そうかい？　それじゃあ、次からは名前で呼ばせてもらうとするよ。ああ、そうそう、俺のことは好きに呼んでくれて構わないから」

与えられた部屋へと着いた総一と一夏は改めて挨拶をした。

「んで、これからどうするよ、総一？」
「まずは……荷物の整理だな。俺は問題ないはずだけど、そっちはどうかわからないしな」
「……だな。千冬姉の言葉を信じるなら着替えと充電器しかないはずだし。場合によっては、購買にでも行って足りない物を買ってこないとな」

指針を決め、二人はそれぞれに荷物の整理を始めた。
しかし、千冬の言葉は真実だったらしい。『一夏用』と書かれて部屋に置かれていたダンボールには本当に着替えと充電器しか入っておらず、整理という整理をする必要のない一夏はすぐに手持ち無沙汰になった。
ならば、さっさと購買に行けばいいと自分でも思うものの、一夏の目はルームメイトに吸い付いて離れなかった。
まず、総一は荷物から私服を引っ張り出すとすぐに着替え始めた。

……そこは問題ない。
しかし、なぜ制服の下から刀――大きさからして『小太刀』という奴だろう――が出てくるのか一夏には理解できなかった。
それだけでは終わらない。着替え終わった総一がやけに細長い箱を丁寧に持ち運び、備え付けのテーブルに載せたと思ったら、中から出てきたのはこれまた刀だったのである。当然だが、制服から出てきた奴よりも長い。扱い慣れた様子で僅かに鞘から抜き放ち、軽く目を走らせた後で再び鞘に納めた。
一夏はそれを真剣だと断定した。以前に千冬から、軽くだが真剣についての手解きを受けたことがあるのだ。見間違いでも勘違いでもなく、あれは真剣だ。

「ん……？　どうかしたのか、一夏？」
「え？　あ、いや、その……」

じっと見ていることに気付いたのだろう。総一が一夏へと問い掛けた。――しかし、一夏は上手く返せない。

「なぁ、それって……真剣、だよな？」

暫く口をモゴモゴさせた後、ようやくそれだけを口にした。

「ああ、そういうことか……！　いや、すまない。そうか、そういえばそうだよな……」

一夏の言葉を聞き、総一は得心がいった様子で何度も頷いた。
驚くのも当然だな、と呟いたのが一夏の耳に届いた。

「どこから説明すればいいかな？」
「いや、どこからっつわれてもな。懇切丁寧に説明されても理解で

きないと思うから簡単に頼む」

苦笑しつつ、了解、と言って総一は説明を始めた。

それによると総一の実家は剣術『二天一流』を伝えているらしく、この年で総一は免許皆伝を受けているらしい。そして総一の所属するユニット『ＢＬＯＳＳＯＭ』のメンバーである真宮寺桜華と加山雄輔もまた、それぞれに剣術を修めており、暇を見付けてはその二人と手合わせをしていた。他のメンバーや事務所の人間もその事は知っており、ここ最近はつっこまれることもなかったとのこと。仮につっこまれたところで、政府から帯刀許可を受けているので何ら問題はない。

それを聞いた一夏は慣れ親しんだ諦観の念で以て受け入れた。そもＩＳという兵器がスポーツとして扱われている御時世である。この年で免許皆伝を受けていようが帯刀許可を受けていようが、実際のところはそう問題ないのかもしれない。

「けど、剣術を修めてるのか……」

諦観の念で受け入れた一夏だが、その点については考えるところがあった。

小学生のとき、一夏は剣を学んでいた。……それこそが箒との出会いに他ならない。

しかし、ＩＳの登場とそれを開発したのが箒の姉、束であったことが問題だった。幼い一夏はよく分からなかったが、束が行方をくらまし、それにより箒は転校を余儀なくされた。

教えてくれる人物と、一緒に学ぶ仲間が揃って離れてしまったことにより、一夏はそこで剣を止めた。

だが、そんな一夏に転機が訪れた。

第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦当日のことだ。千冬が決勝戦に出ることもあり、一夏は当然の如く応援に行った。

……そして、ＩＳを使う数名からなるグループに誘拐された。
生身ではＩＳ相手にどうすることも出来ず、恐怖に囚われたまま時間だけが過ぎていった。
十分か一時間か、それとももっとか、どれだけ時間が経ったかも分からない中、一夏はそれを見た。
騎士とも侍とも言える、桜色をした全身装甲のＩＳ――だと思う、多分。
その手には一振りの刀を握り、そこから繰り出される剣技を以て相手を圧倒する姿。……一夏は今でもその時のことを鮮明に思い出せる。
そして、その姿に、その技に、織斑一夏は心の底から惚れ込んだ。
千冬もまた決勝戦を放棄して駆けつけてくれたが、より心に残ったのは桜色のＩＳの方だった。……これは、結果的に千冬の戦闘を一夏が直接見ることは無かったためでもある。
一夏は建物の中に閉じこめられており、桜色のＩＳが建物内部の誘拐犯を、千冬が建物外部の誘拐犯を相手取ったのだが、それは全くの偶然によるものだった。
その証拠に千冬にも桜色のＩＳに心当たりはないらしく、その正体不明さが『正義の味方』みたいで、一夏の心に刻み込まれたのだ。
それ以降、部活こそやっていないものの一夏は再び剣を始めた。
しかし、桜色のＩＳの動きを模倣したりしてみたものの、一人では素振りが精々。時折千冬が帰ってきても、その細腕で自分を養ってくれている姉のことを鑑みれば、稽古に付き合ってもらうのも気が引けて頼めなかった。
自分はどれ程の腕なのか、自分はあの剣にどれだけ近付けたのか、分からなかったものが分かるかもしれない。
「頼む、総一。俺と剣を合わせてくれ！」
気が付けば、一夏はそう言っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「準備運動はこれくらいで充分だな。……それじゃあ一夏、打ってこい」

翌日、早朝。

未だ陽が上がって間もない時刻。寮の外に総一と一夏の姿があった。

二人共に動きやすい服装で、両者の手には木刀が握られている。それを構え、総一は一夏へと打ち込んでくるように促した。

「いや、打ってこいって言われてもよ……。防具も着けないで本当に大丈夫なのか？」

一方の一夏は気が進まない。剣を合わせてくれるように頼んだのは他ならぬ自分だが、防具も着けないのはいくら何でも危険すぎる。しかも竹刀じゃなくて木刀だ。

「構わないよ。ただ単に君の腕を見るだけだからな。……なら、防具など不要だ。重い防具が動きを阻害する点を加味すれば、寧ろ邪魔でしかない。そして、君と俺には未だ大きな開きがある。ハッキリ言わせてもらえば、君の剣が俺に届くとは思えない」

淡々と総一は言い放つ。

そうまで言われて黙っている一夏ではない。

（なるほど。確かに俺はお前より劣っているだろうさ。けど、だからって、そこまでナメられてたまるかよ！　絶対に一撃当ててやる！）

一夏もまた木刀を構え――――

「いくぜ！」

――――叫び、地を蹴った。

一夏が攻撃し、総一が迎え撃つ。……それが何度続いただろう。

静寂の中、木刀のぶつかる音だけが鳴り響く。

これで防がれたのは何度目だ。――荒い息を吐きながら一夏は自問した。

分からない。――それが一夏の答えだった。

フェイントを掛けようが、力一杯打ち込もうが、総一はアッサリと防いでみせた。

また一合打ち合い、一夏は大きく距離を取った。――自分がこうも汗だくで息も絶え絶えだというのに、総一にそんな様子は見受けられない。

何でこうも違うんだ。単純に腕の差だけだとは思えない。しかも、アイツからは一度として打ってきてないんだぞ。――既に一夏の怒りは治まっており、その心中には次から次へと疑問が浮かんでいた。

「……ここまでにしよう。このままだと、これ以上続けても意味はない」

だからだろうか。一夏の耳には総一の言葉がやけに大きく響いた。

「な……！？　俺はまだやれるぞ、総一！」

「ああ。確かにまだやれるだろう。――だが、それだけだ」

一夏は咄嗟に叫んだが、総一は淡々と返すのみ。

「……どういうことだよ？」
「今回の打ち合い、君から言ってこなかった場合は俺の方から誘っていた。……俺にも思惑があるからな。だが、実際には君の方から誘ってきた。……何故だ？　何故君は俺に剣を合わせるように頼んできた？　君は一体何がしたい？　君が剣を振るう理由はどこにある？」

それが分からない限りこれ以上続ける意味はない。……そう言って総一は構えを解いた。
その言葉は、一夏に冷静さを取り戻させた。
冷静になった一夏は、そのまま自己の内へと潜っていく。
そもそも、自分は何で剣を合わせてくれるように頼んだ？　――あの剣に、どうしようもなく惹かれた剣に、自分がどこまで近付けたのかを知るためだ。
では、何故自分はあの剣にここまで惹かれたんだ？　――助かったと思ったから。嬉しかったから。
本当にそれだけか？　――違う。『あの剣を身につければ、自分もまた誰かを護れるんじゃないか』って、そう思ったからだ。
ならば、それを鑑みて今の自分はどうだ？　――酷く無様だ。
この剣で、誰かを護ることなど出来るのか？　――出来ない。こんな理由を見失った剣では、誰かを護るだなんて夢のまた夢だ。
それに気付いたとして、どうすればいい？　――決まっている。

「心を静めろ」

いつしか一夏は、両の瞳を閉じていた。

「覚悟を決めろ」

そして自分に言い聞かせるように声を出す。

「誰かを護ることは、誰かを傷付けること」

木刀をしっかりと握り直す。

「それを認めて、なおも『護る』と魂で叫べ」

何度となく模倣した、その構えへと移行する。

（――護る！）

魂で叫ぶと同時、一夏はその瞳を開いた。

（そうだ。それでいい……！）

一夏の雰囲気が変わったのを、総一もまた当然の如く感じ取った。

ピリピリと空気が振るえている。

先程までの一夏とは全く違う。

これは断じて見せかけだけの変化ではない。

「……どうやら、理由を思い出したようだな。来い、一夏！　その剣、見事俺に届けてみせろ！」

一夏の気に昂揚した総一が叫ぶ。

答えるかのように一夏が駆けた。

それはさながら居合の如く。

一夏が抜き、総一が防いだ。――しかし、一夏の動きは止まらない。

「おおおおお……っ！」

それは流れるような連続五連撃。只管に模倣していく中で、より自分が動きやすいように、それでいて威力が損なわれないように改良を続けた結果に至った、言うなれば織斑一夏の独自剣技（オリジナル）。

並大抵の者であれば、遮二無二躱そうとすれば躱せるだろう。しかし、防ごうとすればまず間違いなく防ぎきれずに敗れる。……今回一夏が放ったのはそんな連撃だった。

だがしかし、今現在一夏と相対しているのは総一だ。剣を振ってきた回数も歳月も、一夏を軽く凌駕している。

それだけに留まらず、総一は暇さえあれば他者と打ち合ってきたのだ。その結果鍛えられた見切りは、既に一線級の域に達している。

故に、総一が一夏の剣を防ぎきるのは道理である。

「な……！？」

――――通常ならば。

高い見切りを有しているからこそ、総一は困惑することとなった。

一夏の剣によく見知った流れが見えたからである。幼い頃から数えるのもバカらしいほどに打ち合い、互いに切磋琢磨しあってきた――真宮寺桜華の剣が見えたのである。

桜華の剣を、総一は我が事のように理解している。だからこそ、次はどこへどのようにして打ち込んでくるのかも理解できる。それこそ、反射的に剣を合わせてしまうほどだ。

しかし、今現在総一に剣を向けているのは織斑一夏だ。……真宮寺桜華ではない。

結果、総一は二つの理由から反射行動を無理矢理に抑えつけた。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏の剣は防げないため。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏が防げないため。

幸いだったのは、今回総一が守勢に回っていたことであろう。もし攻勢に出ていたならば、最悪、死体が一つ出来上がっていた。

一夏の剣。桜華の影。意識と無意識の相反する命令。……様々な要因が重なり、総一は体勢を崩された。
しかし地力の差か。体勢を崩されてなお、総一は一夏の連撃を防ぎきった。

「届かなかった……か」

結果を認め、一夏は俯いた。――遠い。総一にはまだ届かない。

「いや……」

しかし、連撃を防ぎきった当の本人が、一夏の言葉を否定した。

「え……？」

その言葉に疑問を覚え顔を上げた一夏の前で、総一の木刀が中程から折れて地に落ちた。

「ありがとう、一夏。君のおかげで、俺はまた強くなれる」

慢心はしていないつもりだった。過信もしていないつもりだった。しかし、どこかで油断はしていたのだろう。
今回は反射行動を無理矢理に抑えることが出来た。だが、仮に次があったとするなら、その時も抑えられるかどうかは分かったものじゃない。……今回のことは、運が良かったのだ。
それを知ったからこそ、また一つ強くなれる。
そしてだからこそ、それを発覚させてくれた一夏への感謝は尽きない。

「そしておめでとう、一夏。君の剣は、確かに俺に届いた」

その顔に笑みを浮かべ、総一は自らの敗北を一夏へと告げた。

第4話

「へぇ〜、セシリアって箸の使い方上手いじゃん」

一年生寮の食堂にて、セシリアの箸裁きを見た一夏は感嘆した。彼的に外国人は箸を上手く使えないイメージを持っていたのだ。

ちなみに今は朝食時である。総一、一夏、箒、セシリアの四人が同じテーブルに着いていた。

何故この四人が同じテーブルに着いているのかといえば、そんなに難しい話ではない。

まず、総一と一夏の二人は剣を合わせた後、汗を流してサッパリしてから食堂へと向かった。

その道中、同じく食堂へ向かう箒と遭遇し、一夏が彼女を誘った。

箒が一夏の誘いを承諾し、三人揃って食堂へ来たのだが、生憎と席の殆どが埋まっていた。

そこで席を探す彼らに声を掛けてきたのがセシリアというわけである。

総一、一夏、セシリアの三人は今度の月曜に勝負することになっている。しかし、その空気は特に険悪というわけでもなかった。言葉数こそ少ないものの、どちらかと言えば穏やかだ。

ちなみに今朝はバイキングである。……が、それでも敢えて選んだ食事に名前を付けるとするならば、一夏と箒が和風セット、総一が野菜炒め定食、セシリアがお刺身定食といったところか。

そんな中、ふとセシリアを見た一夏が先の一言を漏らしたのだ。

「……叩き込まれましたから」

一夏の感想にすぐには答えず、ゆっくりと咀嚼し嚥下してから、セシリアはただそれだけを口にした。

ボソリと告げられたその一言には、並々ならぬ感情が込められていた。
ここまで扱えるようになるのに、相当苦労したのだろう。――三者にそう思わせるほどであった。

「そ、そうか……」
「ええ。それより、時間はあまりありませんわよ。そのペースで間に合うのかしら？」

セシリアに言われ、一夏は現在時刻を確認した。
確かにあまり余裕がない。――が、間に合わないわけでもない。

「まぁ、ギリギリ間に合うだろ」

言って、一夏は黙々と箸を動かす。
その速度は速すぎず遅すぎず。しっかりと咀嚼しているのが見て取れた。

「しかし、叩き込まれたって誰にだい？」

今度は総一が問い掛けた。既に食器は空となっており、あとはお茶を飲み干すだけという状態だ。

「名前は北大路神楽（かぐら）。リーヴァ――リヴァイアス・ブルーメールと共にわたくしの数少ない親友ですわ」

誇るかのようにセシリアは答えた。

「ほう？　そなたには日本人の親友がいるのか？」

驚く箒に答えたのは――――

「いや、北大路家は既に帰化している、フランスにその名を馳せる名門貴族の一柱だ。古くより、同じくフランスの名門貴族であるブルーメール家との親交が厚く、現時点において神楽はブルーメールの次期当主であるリヴァイアスと婚約関係にある。また、北大路の女はその家訓により代々『大和撫子たらん』とする姿勢を学ぶ。神楽自身、既に日本では見かけなくなって久しい、数少ない現存する『大和撫子』だ。『書』、『花』、『お茶』は勿論のことだが、それより何よりその『射』が見事だ。あれは一度見たら忘れられない」

――――しかしセシリアではなく総一だった。しかも、その説明は内部事情にまで及んでいる。……もっとも、当の総一とて『北大路神楽』という名前だけでは判断がつかなかった。『リーヴァ』という名前が絡んできたからこそ分かったのだ。

それに驚いたのは他ならぬセシリアだ。

「大神さん、あなた……何者ですの？」

セシリアがそう問い掛けるのも無理はない。

北大路家もブルーメール家も名門の貴族なのだ。一般人がそう簡単に親交を持てるはずがない。いや、仮に親交を持てたとしても、内部事情まで明かされるとは考えられない。

「何者と訊かれても大神総一としか答えようがない。ま、太正の頃を境に大神家は結構手広くコネを持つようになってな。有名どころで言えば……シャトーブリアン、ライラック、レゾン、ソレッタ、ホワード、アルタイル、神崎、花小路とかとも親交がある」

指折り数えながら名を挙げていく総一にセシリアは言葉もない。

……見れば、一夏と箒も絶句している。

「外国のことはよく分からぬが、神崎とは『神崎重工』のことか？」

「それに花小路ってまさか『日本の政財界の重鎮』って言われてるあの花小路か？」

箒と一夏の問いに総一は軽い調子で頷いた。

知らない名前も勿論あるが、知っている名前は『知らない方がおかしい』というレベルである。……そこから考えれば、知らない名前も地元に行けば『知らない方がおかしい』レベルにあるのは間違いないだろう。

そんな名前を総一はポンポンと挙げていったのである。

「あ、頭が痛くなってきましたわ……」

この瞬間、一夏、箒、セシリアの中で『大神総一＝得体の知れない人物』として認められたのだった。

ともあれ。

得体が知れなかろうと頭が痛くなろうと、時間は刻一刻と過ぎていくのが理である。そしてこのままでは遅刻確定だ。

ごちそうさまでした、と四人の声が重なったのはある意味で必然だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「しかし、行動が遅いにも程がある。やれやれ……としか言いようがない。君も災難だな、一夏」

時間が進んで昼休みである。朝食時と同じく、総一、一夏、箒、セシリアの四人が、またも同じテーブルに着いていた。

そんな中、お茶を飲んで一息ついた総一がおもむろに言い放った。……だが、いきなりそんなことを言われても一夏には訳が分からない。

「災難だなって……何がだ？」

目をパチクリとさせながら、一夏は総一へと問い返した。

「恐らくは専用機のことでしょう」

言って、違いますか、とセシリアは目で総一へと問う。

総一もまた、違いない、と目で返す。

「まぁ、確かにな……。世間一般におけるお前の立ち位置を考えれば、専用機が与えられるのは至極当然と言えるだろう。……だというのに、未だ用意されていない。しかもだ一夏。お前がここに来ることを強制されたのはいつだ？　それから何日経っている？」

箒もまたお茶を一口飲んでから同意した。

そこまで言われれば、流石に一夏も理解できる。

「けど、だからこそ手間取ったって事じゃないか？　専用機ってのは基本的に国家や企業に属する人間にしか与えられないんだろ？　そこに例外を作るわけなんだから、意見の対立とかもあったんじゃねぇの？」

一夏の意見も尤もだ。確かに意見の対立もあっただろう。

だが、しかしだ。

「俺が専用機を与えられてから軽く1週間以上は経っているわけだ

が……この事実を踏まえてもそう言えるか？」

一夏に専用機が与えられるのは既に決定されていたことだ、と総一は言外に言ってのけた。

何せ総一の立ち位置は『二番目の男』である。悪く言えば予備（スペア）でしかない。

そんな総一が既に専用機を持っているのであれば、一夏もまた既に専用機を持っていなければおかしいのである。――無論、これには『政府直属機関である華撃団の一員』という総一本来の立ち位置も絡んでいるわけなのだが……。

「大神さんのことが発覚したのがいつかによっても変わってきますが……仮に、用意されるのに時間のズレが発生したとしても、それは『多少』と言える程度のズレでしかないはずですわ。掛かったとしても、精々が一日二日というところでしょう。――まぁ、大神さんを比較対象にするのもおかしいのかもしれませんが……」

そんなことを言って、セシリアはジトりとした目で総一へと視線を送る。確かに、と頷きながら一夏と箒もジト目で総一を見やった。

なにせ今朝の驚愕は未だ記憶に新しい。……この男なら、と三人が思ってしまうのも無理はなかった。

そんな時だ。

「ヒューヒュー、聞きましたよ総一君。何でも今度の月曜にＩＳで勝負するらしいじゃないですかぁ～？　確かイギリスの代表候補生と例の男の子とのバトルロイヤルでしたっけ？　流石『黒髪の貴公子』は入学早々やることが違いますねぇ～」

まるで総一を助けるかのように、横合いからそんな声が掛けられた。

向き直る一同の眼に映ったのは人好きする笑顔を浮かべた女性である。美人と言っても差し支えはないだろう。年齢は二十歳を超えたあたりか。身に着けているエプロンからＩＳ学園のスタッフであることが分かる。

その姿に驚いたのは総一である。――聞いてない。彼女がここにいるなんてこれっぽっちも聞いてない。

「なぁ総一？　この美人さんお前の知り合いか？　ついでに『黒髪の貴公子』って何だよ？」

総一を肘で突きつつ訊く一夏。……しかし、当の総一は驚愕の表情で固まっており、答えられる状態にない。

「やだもぅ、美人なんて照れるじゃないですかぁ～。ま、それはともかく……私のことが気になるみたいね少年？　問われたならば、答えてあげるが世の情け。答えられる範囲でお答えしましょう！　あ、そっちの娘たちも質問があったらどうぞ？　と言うことでまず名前はカグヤ・カプリス。お察しの通り、総一君の知り合いで～す！　より正確に言うならば……愛人？　で、『黒髪の貴公子』ってのは欧州における総一君の通り名ね。同名映画の主演をやったことに由来します。ま、上映自体はまだだけど、前評判だけでかなりのものよ？」

一夏の言葉が聞こえたのだろう。当の女性本人が答えてきた。その表情はコロコロと変わり、アクションの変化も激しい。……正しく天真爛漫という言葉が似合うだろう。

「愛人だと！？」

「わたくしのことは説明無しですのね……。わたくしだって『蒼の公女』ですのに……」

聞き捨てならない言葉に叫ぶ箒。共演し、ヒロインを演じたにも関わらず、自身のことが何も説明されずに落ち込むセシリア。……始めのシリアスはどこへやら。場は一気に混沌（カオス）の様相を呈することとなった。

「……って、誰が愛人ですか誰が！　人聞きの悪いことを言わないで下さいよ、カグヤさん！」

「そんなっ！？　酷いわ総一君……。あの日、同じベッドで二人朝まで過ごしたことは無かったことにするというの！」

「おい、総一！　こんな美人さんを泣かせてんじゃねぇよ！　男なら、言い訳せずに責任を取れよ！」

驚愕から覚め、カグヤの言葉につっこむ総一。目の端に涙を浮かべ、よよよっ、と芝居がかった動作でくずおれるカグヤ。見事に騙され、総一に対して怒鳴る一夏。――未だ混沌は終わらない。

「そんな簡単に騙されないでくれ、一夏……。あぁ、何だか頭が痛くなってきた……。まぁそれはともかく、カグヤさん？　俺はただ、敢えて誤解されるような言い回しをするのを止めて下さいと言ってるんですよ。『同じベッドで二人朝まで』を否定はしませんが、それだって俺が十にも満たない頃のことで、更に言えば、甘酒呑んで酔っぱらったあなたが俺を無理矢理引っ張り込んだんじゃないですか……。はね除けるにはね除けられなかった俺の苦痛をそんな風に弄るんだったら……俺にも考えがありますよ？　フ、フフ、フフフフ……」

頭を抑え、深い溜息をつき、諭すように言った総一は、最後に壊れたように嗤った。

血統かどうか分からないが、大神に連なる男子は基本的に女難で

ある。総一と星司も例外なく女難の気が強い。
それに関して、端からは『リア充』だのなんだの言われており、実際に女性との間で起こっていることなので総一と星司もそれを認めてはいる。――のだが、振り回されることが多い以上、どうしても女難として捉えてしまうのだ。
それでも『日本男児たる者、かくあるべし』と育てられた二人は、基本的に女性を尊重する傾向が強い。――しかし、それにも限度が存在するのである。
抑圧された感情はいずれ爆発するのが理だ。そして、総一がこのように嗤うのは、その導火線に火がついたことを意味していた。
以前総一を怒らせたときにどうなったのか。それをカグヤは情報として知っていた。

（マズ……ッ！　弄りすぎちゃった……！）

故に焦る。
情報が真実かどうか興味がないわけではない。正直に言えば確かめたい。――しかし今は状況が悪い。
仮に情報が真実正しかった場合、ここで総一を怒らせるということは、周りで昼食を食べているだけの、何の罪もない生徒たちを巻き込んでしまうということだ。……それはカグヤの望むことではない。
ならばどうするか。――考えるまでもなく答えが一つしかないことをカグヤは理解していた。
他の相手ならば分からないが、こと大神総一が相手である以上、解決方法は誠心誠意謝るしかない。

「ゴメンなさい、総一君。私が悪かったです。この通りです。……機嫌直してくれませんか？　お友達も困惑してますよ？」

見事に頭を下げられた上でチラリと上目遣いに見つめられては、総一としても怒りを抑えるしかなかった。――だが、ただ謝罪を受け入れるだけでは、また弄られる可能性が高い。……と言うより、まず間違いなく弄られる。ことカグヤ・カプリスが相手である以上、この予測は絶対と言っていいだろう。

「はぁ……分かりました。ただし！　俺たち四人にカグヤさん手製のデザートを奢ってくれるのが条件です。……これでどうですか？」

怒りを呑み込んだ総一は条件付きで謝罪を受け入れた。

ことお菓子作りにおけるカグヤの実力は確かである。些か軽い条件な気がしなくもないが、この条件ならばまた弄られたとしてもカグヤの手作り菓子が味わえるので溜飲は下げられるだろう。

「りょうか～い……って言いたいところなんだけど、流石に今から作るとなれば時間も掛かるし出来合いのものでもかまわないかなぁ？　別に今すぐじゃなくていいって言うんなら時間合わせて作るけど？」

「俺は出来合いのもので構いませんよ。放課後限定だけど今日からまた仕事が入ってるんで時間を合わせるのも大変ですしね」

一夏、箒、セシリアの三人も出来合いのもので構わないと答えた。三人とも、これは降って湧いた幸運であり高望みするべきではない、と考えたためである。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「それで、仕事って何すんだ？　休日はともかく、基本的に敷地外へ出るのは禁止だろ？」

ちょっと待っててね～、と小走りに駆けていったカグヤを見送り、一夏は総一へ訊ねる。……これは一夏が芸能方面に明るくないこともあるが、純粋な興味から出たセリフであった。

「ん？　写真撮影。流石に仕事でも敷地外へは出られないから敷地内での撮影になるけどな。……これは聞いた話なんだが、仕事の話を持ちかけたらここの経営陣は二つ返事で頷いたらしい。まぁ自慢じゃないが、俺の人気もかなりのものだからな。『撮影協力』ってことで振り込まれる金額を考えたら、まず間違いなく頷くだろう」

至極当然といった様子で総一は答える。

「そんなわけで、仕事後自室に帰ってからはともかく、その前に時間を取ることは難しい。それを踏まえた上でだが……一夏、お前はこれから勝負当日までの放課後、俺の仕事中はただ只管に剣を振れ。自分の身体の動かし方さえ分かっていれば、あとはＩＳの方で合わせてくれる。そこに理論は必要ない。『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を例に挙げると、攻撃の過程にそれが必然として組み込まれているのならば出そうと思わずともＩＳの方で発動してくれる、といった具合だ」

そこまで言ったところで、総一はひとまず言葉を切った。そして、聞き手たる一夏が言葉の意味を理解するのを待つ。

「言いたいことはわかったけどよ、だからって理論を学ぶ必要が無いってわけじゃないんだろ？」

「当然だ。理論は俺の仕事が終わった後で教えるさ。だけどお前の場合、肝心の機体が手元にないだろう？　それでどこまで理解できるか判断が付かないんだ。……ほら、よく『体育会系』とか『文化系』とか言うじゃないか？　それと同じだよ。『文武両道』のヤツもいるが、大抵の場合はどちらかに偏っているからな……。けどま

ぁ、見た感じお前は体育会系だと思うから剣を振ることを勧めてるのさ。実際に誰かと打ち合うなり想像上の相手と打ち合うなりやり方は任せるけど、ただ闇雲に振るだけじゃ無意味だからな？　相手の動きに自分はどう合わせるか、自分の動きに相手はどう返してくるか、ありとあらゆる状況を模索して振るんだ。それが集中力の増加にも繋がるし、視野の拡大にも繋がっていく。……ただ、これは諸刃の剣でもあることを言っておく。こういう事をしていた場合、本質が兵器であることも相俟ってＩＳを道具として見かねないんだ。確かにそれも間違いじゃないが、今日の授業で教わったようにＩＳは『意識』と呼んで差し支えないものを持っている。つまりは純然な道具じゃない。相棒（パートナー）なんだ。ＩＳを動かす際にはそのことを忘れるなよ？」

総一がこう言ったのには根拠がある。

そして、その根拠こそが霊子甲冑だ。

霊子甲冑の起動には強い霊力を必要とするが、実のところそれだけではスムーズに動かない。何故なら、霊力とは言わば『精神エネルギー』でありカタチを持たないからである。

故に、霊子甲冑には操縦者の負担を軽減させるために、この『カタチのない力』を『物理エネルギー』に変換する機関が組み込まれている。それを『霊子力エンジン』という。

この霊子力エンジンを形成する大きな要素が『霊子水晶』と『霊子反応基盤』――別名『霊力反応基盤』――である。

霊子甲冑の起動は三つの段階に分けられる。

第一に、操縦者の霊力を霊子水晶が物理エネルギーである『霊子力』に変換、増幅する。

第二に、霊子反応基盤によって霊子力を安定化させる。

第三に、この安定化した霊子力を霊子力エンジンが受け取っているのである。

この一連の流れを『霊子力循環システム』と称している。……も

し操縦者の霊力だけで霊子甲冑を動かそうとすれば、この一連の流れを操縦者だけで行わなければならず、相当の潜在能力が求められると同時に多大な負担が掛かってしまうのだ。

さて、霊子力循環システムの中で問題となるのが霊子水晶と霊子反応基盤である。

まず霊子水晶だが、文字通りに水晶なのである。これは偶然から発見されたものであり、その特性もあって数が少ない。人工的にも精製できるのだが、その効果は天然物には遠く及ばないのが実状である。

次に霊子反応基盤だ。一定以上の霊力がないと反応せず、霊子水晶が変換、増幅した霊子力を安定域まで持っていけないのだ。安定域まで持っていけないということは霊子力エンジンが起動しないということであり、つまりは霊子甲冑が起動しないということである。……霊子甲冑の起動には強い霊力が必要、というのはここから来ているのだ。

それだけでも問題なのに、これらは独特の『波長』を持っているのだ。――これには諸説あり、霊子水晶が持っているという説もあれば、霊子反応基盤が持っているという説もある。

そして、この波長を『心』と言い換えることもあり、これを重ね合わせなければ霊子甲冑は本来の力を発揮しないのである。

これこそが、総一の語った根拠である。

確かに霊子甲冑とＩＳは別物だ。その設計思想も設計理念も異なっている。……だが、それでいて似ている部分が多いのだ。

現に、それを証明するかのような事も起こっている。……ＩＳに初めて触れたときには自分を見つめる存在を、霊子甲冑に初めて触れたときには自分に呼び掛ける声を、総一は感じたのだ。

それこそがＩＳと霊子甲冑の似て非なる部分であろう。『心』と『意識』、『声』と『視線』……確かに違うものである。そして同時に、純然たる道具には必要がない、という点で共通しているのだ。

「……なるほど」

総一の言葉にも一理ある、と一夏は思った。――全面的に正しいとは思わないが、それでも自分の場合として捉えるならば理に適っている。第一、あのサッパリわからない授業のことを鑑みれば、理論を学んだところで理解できるとは思えない。……ああ。確かに自分は体育会系だ。

「……そうだな。他の奴はどうか分からないけど、俺の場合はお前の言葉通りにするのが一番だと思う」

瞑目し、考えを纏めた一夏は頷いた。

「箒！　放課後、時間は取れるか？」

「あ、ああ……。問題ない」

一夏の言葉に箒は頷いた。

昨日話したときには見えなかった真っ直ぐさが、炎が、今の一夏には見える。

これでこそだ、と箒は思った。

「……なるほど。織斑さんもまたサムライだったということですか……。フフ、大神さんにわたくしの舞を刻み込むことが出来ればそれでいいと思っていましたが……考えが変わりました。織斑さん？　あなたにも私の舞と名前を刻み込んで差し上げます。――ですから、その返礼としてあなたもまた、あなたの武と名前を私に刻みつけてくださいませ」

微笑を浮かべ、セシリアが言った。

それは宣戦布告にして挑発だ。

バトルロイヤルをする事になったとはいえ、セシリアの目に敵として映っているのは総一だけであり、一夏は添え物でしかなかった。……それが、つい先刻までの嘘偽り無いセシリアの本音だ。

しかし一夏の言葉が、その身から発せられる気迫が、セシリアの考えを覆した。一夏もまた自分の敵として捉えるに相応しい相手である……と。

そして、敵には全力でぶつかるのが礼儀だ。

だからこその宣戦布告。

同時に、自分の見立てが間違っていない証明が欲しい。

それ故の挑発。

「ああ、見せてやるよ。未熟なことこの上ないが、それでも今の俺に出来る最高の剣をな……！」

「今度の勝負はあくまで試合（ゲーム）であって死合（デュエル）じゃない。……なら、精一杯楽しんだ方が得策か。よし、期待に添えるかどうかは分からないが、俺の剣も披露させてもらうとしよう」

「わたくしは剣を学んでいないので心苦しい気がしなくもないのですが、この国では『舞は武に通ず』という言葉があると聞き及んでおります。……ですから、わたくしは舞を披露させていただきますわ。どうか心ゆくまで楽しんでくださいませ」

三者の視線が交わり、見えない火花が宙に散る。

しかしそれも一瞬のこと。

「は～い、お待たせ～」

届けられたデザートを前にしては、そんなことを続けたところで何の意味もなさない。

「まぁそれはそれとして……」

「今はこれを片付けるのが先決」
「……だな」
「いただきます」
口々に言い、一同はカグヤの手作り菓子を頬張った。

幕間：真宮寺桜華　1

「……今、なんて言った？」

総一がＩＳ学園に入学したその翌日のことである。夜遅く――深夜といっても差し支えない時刻に掛かってきた総一からの電話。その内容を聞いた桜華は普通に問い返した。

「だから、織斑一夏に剣を教えたことでもあるのか？」

どうやら聞き間違いではなかったらしい。――桜華は思わず溜息を吐いた。

「ああ、いや、言い換えよう。そもそも、織斑一夏とは一体誰だ？」

桜華の世界は非常に狭い。総一や加山を始めとした一部の例外を除き、一切の興味を持たないのだ。

有ろうが無かろうがどうでもいい。いてもいなくても構わない。それらの有無で桜華の世界に影響など出ないのだから……。

仕事上接する必要のある相手であっても、桜華にとっては記号でしかない。だからこそ、そんなモノに好意を抱くこともなければ嫌悪を抱くこともない。ただ与えられた仕事、言われたことを淡々とこなすだけだ。……それはさながら機械の如く。

しかし、だからこそ桜華の評価は高かった。何故なら、桜華の行動は確かに機械のそれであるが、真実機械ではない。感情も持っていれば、その表し方も分かっている人間なのだ。

喜び、哀しみ、怒りといった感情を、桜華は求められたとおりに表すことが出来る。……周囲に無関心だからこそ、逆に素直に表すことができるのだ。……それが真宮寺桜華という人物である。

そしてそれ故に、桜華がまともに認識していることなど数少ないのが実状だった。
たとえ『織斑一夏』が世界で一躍有名になろうとも、そんなのは桜華にとってどうでもいいことなのである。

「ああ。そうだな。お前はそういうヤツだった。……織斑一夏は護衛対象だ」
「……なるほどな」

言われてみれば、そんな名前だったような気がしなくもない。――多分に呆れを含んだ総一の言葉に、記憶を整理しつつ桜華は頷いた。

「それで？　どういった経緯で私がそいつに剣を教えたなんて素っ頓狂な話が出てきたんだ？」

桜華が問い返すのも至極当然である。
桜華はその無関心さも相俟って、自発的に動くことが少ない。
それでも、自分の世界に関わることなら寧ろ積極的に動くし、請われた場合も素直に聞くだろう。
前者の場合ならまず忘れることなどないし、後者の場合でも事実の有無くらいは覚えている。
しかし、今回の総一の話はどちらにも該当しないのだ。

「そうか……。いや、実は今日の朝、彼と剣を合わせたんだ。……最初の内はそうでもなかった。軽い挑発に乗って乱れるほどに、彼の剣は軽かった。暫く打ち合ってもう充分かと思った。それでも『もしかして』という思いが拭えなかったから理由を思い出すように促してみたんだ。……そしたらまぁ、激変したよ。まさしく雲泥の差だった。思いがけず昂揚したよ。……しかし、本当に驚いたのは

その後だ。彼の剣によく見知った流れが見えたんだからな……。そうだ。桜華、お前の剣だよ」

いや、あの時は本当に焦ったよ。――そう言って総一は言葉を切った。

そう言われれば、桜華としても興味を惹かれる。……なにせ、他の誰でもなく大神総一が断言しているのだ。

「そいつの顔写真とかはあるのか？」

「俺は持ってないな。それに時間も時間だ。これから写メを撮って送るにしても、鮮明とは言い難いものになるだろうからな……。寧ろ加山に頼んだ方が確実だと思うぞ？」

「……そうか。なら、加山に頼んでみることにしよう」

「それがいいさ。それじゃ、お休み。夜遅くにすまなかった」

「気にするな。私としてもお前の話は興味深かったからな……。お休み」

電話を切り、桜華は横になる。……その顔は知らずの内に笑みを浮かべていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「待たせたな、桜華。……これが、今朝方頼まれた織斑一夏に関する資料だ」

「すまん。手間を掛けさせた」

お昼のことである。所属事務所『浪漫の嵐』の食堂にて昼食を取っていた桜華の前に、いくつかの封筒を持った加山が現れた。見れば、封筒にはそれぞれ名前が書いており、どうやら本人だけでなくその関係者の資料も持ってきたようである。

これは素直にありがたかった。一方向からでは分からないことも、多方向から見ることで分かることがあるのは確かな事実である。
加山の配慮に、桜華は素直に礼を告げた。

「いいってことよ～。……だが正直な話、一体どうしたんだ？　こう言っちゃあ何だが、お前が他人に興味を示すなんて相当だろう？」
「昨夜、総一から電話があってな……。その時に言っていたんだが、そいつの剣に私の剣が見えたらしい。しかし、生憎とこちらには覚えがない。だが、他ならぬ総一が言ってるんだ。……気のせいと聞き流すには、些か問題があるだろう？」
「むぅ……。そいつぁ確かに……」

加山が唸るのを眺めながら、桜華はおもむろに封筒の中から資料を取り出す。

「ああ。ちょい待った。一応、機密書類も入ってるんでな……。ここで取り出されると問題がある。部屋に帰った後にでもゆっくりと調べてくれ」

――――取り出そうとした。

「ふむ。確かに」

加山の言っていることは尤もである。これはあくまで華撃団の有する資料だ。また、いかに『浪漫の嵐』がその隠れ蓑であったとしても、当然ながら関係者ばかりで運営されているわけではない。華撃団には関わりのない、その存在すら知らぬ一般人も務めているのだ。
そしてここは食堂である。一般人の目というならば、ここほど触れそうな場所もない。

「では、私は部屋に戻る。何か思い出したら連絡するよ」
「おう。……ってもまぁ、気のせいですめばそれが一番楽なんだがな〜」
「違いない」

資料を脇に抱え、食器を返却口に戻して、桜華は自室へと向かう。
……その足取りは、存外軽いものだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「こいつが織斑一夏……か。確かに見覚えがあるような気もするが、これだけだとな……」

部屋に戻った桜華は、早速資料を取りだした。そして、まずは添付された写真に目を向ける。……しかし、その結果は芳しいものではなかった。
まぁ、それも当然である。桜華が気に留めていなかっただけで、織斑一夏の姿はニュースや新聞を始めとした様々な媒体で流れたのだ。……視界に映る回数が多ければ、その分だけ記憶に留まるのも必然である。
写真から記憶を洗うのには見切りをつけ、桜華は記された情報に目を通す。
出身、経歴、家族関係、交友関係……一通り読み進めてみたものの、やはり記憶に引っ掛かるものはない。
しかし、備考欄に気になる一文を桜華は見付けた。
何でも『二年前のある時期を境に、公園などで素振りをする一夏の姿が度々見かけられるようになった』らしい。……ここがポイントだろう。それまでと異なる行動を取り始めたということは、その『ある時期』に何かがあったことを示している。

華撃団で用いる資料形式の場合、備考欄には噂から何から取り留めのないことも記載するのが通例だ。文字通りの備考であって、その信憑性はハッキリと言えばアテにならない。
だが、今回ばかりは別だろう。少なくとも『剣』という部分で総一の言葉と合致する。

「チッ……」

桜華は思わず舌打ちする。……幾つかのキーワードは見つかったが、肝心の部分が分からないのだ。

「仕方ない、と言えば仕方ないのかもしれんが……」

深呼吸をして幾らか気分を落ち着けた後、桜華は呟いた。――そして思考する。
なにせ織斑一夏は極々普通の一般人だったのだ。……自然、これらの情報の大半は一躍有名になってから掻き集めただろうことを意味している。いくら姉や交友関係者が有名人だとて、当時の織斑一夏本人はその限りではないのだ。それでも、有名人の関係者だからこそこの短時間でここまで情報が集まっているのだろう。……また、この備考欄に書いてあることからして、そもそも転載の可能性が高い。いくら何でも、今から二年前の噂を集めるなど不可能に近いからだ。

「そうか、転載か……！」

思考を重ねた末その可能性に思い至った桜華は、すぐさま別の資料に目を通す。
果たして、姉である織斑千冬の資料にも気になる情報を見付けた。

「第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦を突然辞退。その後、ドイツ軍で教官を務める……か」

突然の辞退だけならば、考えられる可能性は様々にある。……しかし、誰もが辞退の理由を知らず、それでいて唐突にドイツ軍で教官を務めるとあらば、『何かあった』と声高に叫んでいるようなものだ。

そして、桜華は『モンド・グロッソ』の時期と、ある事件の時期が重なっていることに思い至った。

「加山か！　二年前、私が遭遇した『騎士団（ナイツ）』に関する資料を持ってきてくれ！　時期はＩＳの『モンド・グロッソ』辺りだ！　もしかしたらもしかするぞ……！」

すぐさま加山に連絡を入れる。

「……！？　了解した！」

桜華の勢いに呑まれたのか、電話に出た加山は最初こそ絶句していた。しかし、すぐさまその意味に気付いたのだろう。それだけを言って通話を切った。

それから暫し。桜華の部屋のドアがノックされた。

「入ってくれ」

「失礼する。……すまない。思いの外時間が掛かった」

入室するなり謝罪してきた加山に対し、気にするな、と桜華は座るよう促した。……確かに時間は掛かったが、それでも突然の要請に対するものとしては充分に早い。

桜華は加山の持ってきた資料を受け取るも、それをすぐには取り

出さない。
それに目を通すよりも先に、そうなるに至った経緯を説明するべき、と考えたためである。
すぐに確認したい気持ちも確かにあるが、飛躍しすぎている可能性も否めないのだ。
それならば、加山にも意見を伺った方が良い。『隠密・諜報部隊』である『月組』の隊長を務めていることもあって、加山は情報の扱いに慎重だ。

「私が気に掛かったのは……ここと、ここだ」

桜華の指した部分に加山は目を向ける。

「これは……。すまない。もう少し待っていてくれ。俺も思い出したことがある」

言うなり、加山は退室した。……それを怪訝に思いながらも、桜華には待つことしかできない。
そして、再度ドアがノックされる。
促せば、また別の資料を持った加山が入ってきた。

「それは？」
「『森羅』に関する資料だ」

桜華の問いに重々しく加山が答える。

「おいおい……。まさか『騎士団』だけじゃなく『森羅』まで関わってるって言うのか？」

頭を抑えて桜華が呻く。

世界規模で活動している秘密結社。……それが『騎士団』と『森羅』である。
その目的が一切不明なこと、そして隠匿性が非常に高い点で両者は共通していた。……しかし、両者は別に仲間というわけでなく、時に協力し時に敵対している関係だ。

「直接関係しているかどうかまでは分からん。……あった。ここだ」
「なになに……。未確証。ドイツ。某月某日、議会にて投棄されたはずの案件が正式な認可を受けて施行されていることが発覚。認可書類には強く反対していたA氏――安全のため実名記入を避ける――のサインもあった。しかし、A氏にはサインした覚えなどなく『森羅』の『言霊使い』によるものとみられる。後日調査をしたが、『森羅』が関与した形跡は何一つとして発見できなかった。……っておい、これ十年以上前のことじゃないか。今回のことに関係あるのか？」

加山の指した部分を読み進めた桜華は、胡乱気に問い返した。
「それだけなら何とも言えんが、こっちも加えればどうだ？」
次に加山が示したのは千冬の資料であった。……より詳しく言うならば、千冬が教官を務めた部隊に関する資料である。
「……なるほどな」
桜華は加山の言葉に同意した。二つの資料が重なったのである。
「いつのまにか施行された『人造兵士生産計画』。それによって生まれた兵士が、今度は十年以上の時を経て『織斑千冬』の教導を受ける……か。フン、出来すぎにも程がある。そして――――」

言いつつ、桜華は『騎士団』の資料を取り出し目を向ける。

「――――こいつも加えればもっとだ」

二年前、桜華が関わった『騎士団』の事件。

桜華は思い出す。二年前の出来事を……。

大半のものには無関心な桜華でさえ未だ忘れられずにいる、ある男のことを……。

自らを『疾風』と称した、『騎士団』の戦士を……。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

仕事で訪れたその街を散歩していたときのことである。桜華は一人の男に目を留めた。……それは本当に珍しいことだ。

確かにその男は全身で『自分はいま不機嫌です』と言い表さんばかりの態度を取っていたが、それだけなら桜華は気にすることもない。

しかし、現実として桜華はその男に目を留めている。……桜華自身気付いていなかったが、その男には目を留めるだけの意味がある、ということを表す行為だったのである。

男も目を向けられていることに気付いたのだろう。面倒くさげにその目を桜華に向け――――

「ハッ……！　こいつは重畳だ！　悪いが……ちっとばかし付き合ってもらうぜ、『桜色の魔祓士（ホーリー・ピンク）』さんよぉっ！」

――――直後に態度を一変させた。嬉々として言い放つなり、その男は桜華へと迫る。

「な……！？」

桜華は驚きつつも、遮二無二その一撃を回避した。

アイドルという仕事をしていれば、性質の悪いストーカーに出会うこともある。……故に、街中で飛びかかられるだけならば――珍しいと言えば珍しいが――桜華には経験があった。

しかし、流石にこれは初めてだった。

飛びかかる間にも、男を包むように鎧が形成されたのだ。世を騒がせているＩＳとも違う。……どちらかと言えば霊子甲冑に近しい。

「何だお前は？　ついでに言うとその鎧は？」

即座に身を起こした桜華は、いつでも抜き放てるように刀を構え油断無く問い掛ける。

「ハ、流石だな。本気じゃなかったとはいえ、今の一撃をよく躱したもんだ。……とは言え、確かに今の行いは俺に非がある。すまなかったな。気の乗らねぇ仕事でムカついてたところだったんだ」

男は桜華に賞賛を浴びせ、直後に謝罪した。……頭を下げることはしなかったが。

「では、名乗らせてもらおう。俺は『騎士団』が一人、ゲイル。『虚ろな鎧（ホロウ・メイル）』・『シルフィード』を纏いし……疾風だ！」

言うなり、男――ゲイルは再度桜華へと向かう。その手には刺突剣（レイピア）。『疾風』を称するのは伊達でないということか、その速度は先程よりも尚速い。

「チッ……！」

桜華は舌打ちし、跳躍。この速度を前にしては、たとえ相手の刺突剣を弾くことが出来てもはねられてしまう。

「良い判断だ！　……だが、甘ぇっ！」

並外れた速度だというのに、ゲイルもまた即座に跳躍。勢いのままに蹴撃を放つ。……その姿には、何ら負荷をおった様子が見られない。

「が……っ！？」

桜華は愛刀『荒鷹』で直撃を防いだものの、如何ともし難く吹き飛ばされる。

「チッ……。ヤリすぎちまったか……？」

それを見て、ゲイルは落胆したように舌打ちする。

「うぉ……っ！？」

――――その直後、走る斬撃にはね飛ばされた。

「って～な、おい！　一体何だってんだ……？」

ゲイルは首を傾げる。――確かにあの斬撃は払った。……しかし、刃が素通りしてしまったのだ。

「破邪剣征・桜花放神。自らの狙ったものにだけ威力を伝える、『破邪の剣』の初伝だ。……少なくとも、これが出来なきゃ『霊剣・

荒鷹』に認められることはない。……情報不足だったな？」

言いつつ現れたのは桜華だ。服は所々破け、血も流れているが、その足取りはしっかりしている。

「さて、許可は下りた。……お前が『虚ろな鎧』とやらを纏うなら、こちらも纏わせてもらうとするさ。霊子甲冑をなぁっ！」

時代の流れと共に進展する技術は、過たず霊子甲冑にも適用されている。その中でもＩＳに用いられている量子格納技術は特に大きい。流石にそれそのものはＩＳコアに組み込まれているので用いられていないが、着眼点として多大な恩恵をもたらしたのだ。

ＩＳを独自の力で開発した篠ノ之束は確かに天才である。

彼女に比べれば、華撃団の整備陣・開発陣は劣っているだろう。……しかし、個人としては劣っていても、総体としては決して劣っているわけではない。

それがここに証明される。

桜華の咆哮に答えるかの如く、足を、腕を、そして頭部を……身体全体を光が包む。それは徐々に薄まり、完全に光が消えたとき、彼女の全身は桜色の鎧に覆われていた。

「さあ、戦ろうか？　先刻までのように楽にいくとは思うなよ？」

「フン……上等だ！」

時に地面を、時に壁を、時には中空さえもを足場にして二人は打ち合いながら移動する。

「おい！　お前……どうして手を抜いている？」

打ち合いながら、桜華は問い掛ける。……桜華はそう言うが、ゲ

イルの刺突はまさに閃光の如しだ。端からはとても手を抜いているようには見受けられない。
しかし、桜華の言葉は正しかった。……ゲイルは特段、攻防に手を抜いているわけではない。それでも、その意識はこの戦闘だけに向いているわけではなかった。
必倒の意志がない。必殺の意志がない。……それは、手を抜いているのと同義である。

「言ったろ？　気の乗らねぇ仕事でムカついてたってよ。……『騎士』ってのは忠誠誓ってナンボのもんだが、それだけじゃねぇ。民を、力持たぬ弱き者を護ることもその本分だ。上が何を考えてやがるのかは知らねぇが、今回の仕事はその弱者を巻き込むことだ。……それが俺には我慢ならねぇ。だが、諌めの言葉も届かねぇ。こうなっちまうと、立場上、俺自身にはどうすることも出来ん。……出来んが、だったらどうにか出来るヤツを放り込みゃあ良いだけの話だ」
「……なるほど。つまり、私はお前の怒りの捌け口にされたと同時に厄介事を押し付けられるわけだ。まったく面倒な……。だが、まぁ良いだろう。お前みたいなヤツは嫌いじゃない」
「助かるぜ。……これからお前を飛ばす。あとは上手いこと頼んだぜ？」

剣を打ち合いながらの、その会話。『騎士団』と『華撃団』という、本来ならば敵対関係にある者同士の会話として、それは奇妙な会話だった。
この短時間で友情など生まれるはずがない。信頼など出来るはずがない。……それでも、互いが互いにそういったモノを感じていることは事実だった。

「いくぜ！」

「ああ」

ゲイルの蹴撃を足場に、桜華はその建物へと突撃。
そして中にいたヤツらを片付けて――――

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「――――ああ。思い出した。そうか、あの時の少年か……」
「……と、言うことは？」
「そうだ。二年前の『騎士団』事件の際、幽閉されていたのが織斑一夏だ」
「分かった。この件は俺から司令に報告しておく」

加山を見送りながら、桜華は決めた。

「明日……は無理だから明後日か。織斑一夏に会いに行ってみるとしよう」

呟き、桜華は惰眠を貪ることにした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「すまないが、織斑一夏君……であってるかな？」

ＩＳ学園へと赴いた桜華は、その生徒へと問い掛けた。

「はあ……？　確かに俺は織斑一夏ですけど……」

返事は肯定。……それを確認した桜華は話を進める。

「総一から話を聞いてね。もしよければ、これから手合わせしてくれないか？　……ああ。自己紹介がまだだったな。私は真宮寺桜華という」
「ああ……！　聞いてます、聞いてます！　何でも北辰一刀流の免許皆伝だとか！？」
「ははっ、君は面白いな。真っ先に出てくるのがそっちか。大抵の場合、仕事の方で驚かれるんだが……。まぁそれはともかく。都合はつくかな？」
「ええ、大丈夫です。いつも手合わせをお願いしてるヤツが部活に強制招聘されてしまったんで、正直どうしようかと思ってたんですよ。……手頃な場所に案内するんでついてきて下さい」

一夏の後を桜華は追う。……道中、特に会話らしい会話もない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「そら、どうした？　どこから打ち込んできても構わないぞ？」

実に気楽に桜華は言う。その立ち姿はまさにぞんざい。構えらしい構えも取っていない。
その一方で、一夏はまったく動けない。動く様子がない。……動きたくても動けないのだ。
目が霞む。冷や汗が止まらない。歯がカチカチと音を鳴らす。
そう、桜華の放つ殺気に一夏は完全に呑まれていた。
これには桜華の気性も関係している。
基本的に桜華の戦闘は殺るか殺られるかだ。剣を執る理由が理由なのだから、こればかりはどうしようもない。
仲間内で手合わせをする際にはその限りでないが、基本的には殺気全開である。

「ああ、そうか……。これならどうだ？」

その事実に、桜華自身ようやく思い至ったのだろう。

仲間の中でもデキない方に分類される相手との手合わせを思い出しながら、桜華は静かに殺気を弱める。……消すのではなく弱めるのがポイントだ。完全に消してしまえば、耐性がつくことも無いからである。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

地面にへたり込み、一夏は荒く息を吐く。――まだ若干息苦しいけど、今のに比べたら万倍マシだ。

「はあ……はあ……いま……のは？」

呼吸を繰り返し、ある程度落ち着いてから一夏は訊ねる。――生きた心地が、まったくしなかった。

「すまないな。つい、いつものように殺気を全開にしてしまった」

「そう……か……いま……のが……」

その返答を聞いて、一夏は納得した。――箒との手合わせとは違う。総一と手合わせしたときよりもなお空気が重苦しかった。今のが殺気だというのなら、それも当たり前か……。

「どうする？　止めておくか？」

「いや、続ける。さっきの殺気に慣れさせてくれ……」

「……分かった」

自身では面白いことを言ったつもりだが、どうやら外してしまっ

たらしい。――呆れたように頷く桜華を見て、一夏は思った。
それからは、ただ時間だけが過ぎていく。
時折、遠くから部活のものと思しき喧騒が聞こえてくる。
場面だけを見れば、実に長閑な一刻だ。
しかし、その実態はまるで違った。
一夏を見ればそれが明らかである。その冷や汗は、治まるどころかゆっくりと勢いを増していく。
そう、一夏はまるで殺気に慣れていなかった。
だが、それは一夏の問題ではない。様子を見つつ、桜華が徐々に殺気を増しているからである。
桜華自身このようなまどろっこしいやり方など好みではないが、出来ないわけでもないのだ。……ならばやらない理由など無い。
戦闘という御馳走を頂くための事前準備だと思えば、この程度はまるで苦にならないのである。
そして――――

「すみません。待たせました」

――――自身でも知らぬ間に、一夏は桜華の殺気に完全に慣れてしまっていた。
それは、普通には考えられないほどである。
慣れるまでの異常な速度。……一夏の異常性を指し示す一端であった。

「もう慣れたのか……？　まったく……。私も大概イカレてるが、お前も負けず劣らずだ」

その事実は、桜華にも呆れをもたらす程であった。

「来い……！」

今度こそしっかりと構え、桜華は言い放った。

「いきます……！」

それに応え、一夏が駆ける。

打ち合う音だけが響く。

一夏の攻撃は、一度たりとも桜華に届かない。その全てが或いは躱され、或いは防がれている。

距離が離れ、間をおかずに一夏は駆ける。

そして――――

「ぐぅ……っ！」

「え……？」

――――桜華の苦悶と、一夏の呆けた声が重なった。……何のことはない。端的に事実を示すなら、単に桜華が無防備に一夏の一撃を受けただけのことである。

「え……？　なん、で……？」

一夏は現実を認識できない。したくない。

「宿題だよ」

「しゅく、だい……？」

「剣を続けるつもりなら、この恐怖を乗り越えろ。……分かったか？」

「……分かった」

かなりの時間をおいて、一夏はようやくそれだけを口にした。

「それじゃあ、またな。……ああ、そうそう。今の一撃、実に良かった」

そう言って桜華は去った。……呆ける一夏をその場に残して。

第5話

「俺……不戦敗になるのかな？」

観客席から試合会場たるアリーナを眺めつつ、一夏は隣に立つ箒へと訊ねた。――アリーナには、既に総一とセシリアの姿がある。本来ならば、自分ももうそこに立っていておかしくない時間なのだ。

「……それを私に聞かれても答えようがない。それでも答えるとすれば……このままだとそうなるだろうな」

「やっぱりか……」

一夏は深い溜息をついた。

決して長いとは言えない今までの人生だが、それでも、決して短いとも言えない人生だ。

その中で日々を過ごすうちに、諦めることには慣れてきたつもりだった。どれだけ望もうとも、叶わないこと届かないことは必ずある。……今、自分がＩＳ（ここ）学園にいるのもそうだ。

今でも思い出せる。『男なのにＩＳを動かせた。だからＩＳ学園に通え』……お偉いさんの遣いでやって来た黒服が自分に告げた言葉だ。言っていること、言葉の陰に隠されていることはそれとなく分かった。それでも自分は藍越学園に通いたかったし、実際にそのことを告げた。

だが願いは叶わず、届かず、自分はＩＳ学園に通うことになった。

だから、諦めること、流されることには慣れているつもりだった。

それでも――――

「――――今回だけは諦めきれない。流されてたまるかよ……！」

言って、一夏は歯を噛み鳴らした。

「お前の気持ちはわかる――とは言えない。私はお前ではないからな」

一端言葉を切り、箒は一夏を見つめた。

鋭い、真摯な瞳だ。

「それでも、想像することは出来る。確かに苦しいだろう、辛いだろう。だが、一体何が出来る？　間もなく試合が始まるというこの状況下にあってまだ！　お前のＩＳは届いていないんだぞ……」

始めは淡々と、次第に勢いが上がり、最後には俯き声を震わせた。

泣いているのか……。――一夏は察し、思う。

試合のことが決まってから今日まで、箒は嫌がる様子も見せず自分の稽古に付き合ってくれた。部活の先輩からのお達しで相手が出来ない日もあったが、その日以外は毎日付き合ってくれたのだ。

確かに箒は試合に出るわけではないが、ここまで付き合ってもらった以上、当事者と何ら変わりない。……現に今、織斑（おれ）一夏の事なのに、我が事のように悲しんでくれているのだ。

この姿を前にして、それでも俺は諦めるというのか？　流されるというのか？　――そんなこと、出来るわけがないだろうが……！

こうして嘆いているのは何故だ？　――試合に出られないからだ。

何故出られない？　――専用機が届いていないからだ。

そもそも、試合に出るのに専用機が必要なのか？　――否だ。試合に出るだけならば量産機で充分だ。

ではどうして量産機で出ない？　――データが取れないからだ。

この上なく不利になるからだ。

それを織斑一夏が気にする必要があるのか？　――無いな。不利は元々だし、データなんぞ知った事じゃない。

ではどうする？　――出る！
結論は出た。……ならば、ここでこうしている必要はない。
「箒、征ってくる。応援、頼むな？」
「……え？」

箒は呆けた声を出して顔を上げる。
既に一夏の姿は隣になかった。
徐々に遠ざかっていく背中が映った。
その背に声を掛けることも出来なかった。
箒に出来たのは、呆然と見送ることだけだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……すみません、織斑くん。もう一度言って貰えますか？」
「打鉄で出ます」

山田真耶の困惑は深まった。どうやら聞き間違いではなかったらしい。

「いや、あの、織斑くん？　打鉄で出ると言っても申請はしているのでしょうか？　突然そんなことを言われても許可できないというか……。寧ろ私の一存では何とも言えないというか……」
「そんなことは関係ありません。今日、試合を行うと決めたのもそちらですし、自分に専用機を用意すると言ったのもそちらです。そして、各自試合に向けて準備をしておけ、とも言われました。だからと言うわけではありませんが、自分はＩＳを持たないなりに今日の試合に向けて訓練をしてきました。……それが、いざ試合当日になってみれば、まだ来ていない？　巫山戯てるんですか？」

しどろもどろの真耶に対し、一夏は淡々と告げる。
普段の一夏からは考えられないその口調が、一夏の怒りを表しているかのようだった。

「総一もセシリアも、俺との勝負を楽しみにしているって言ってくれたんです！　俺もまた、俺の剣で答えてやるって返したんです！
……確かに俺は今まで何度となく諦めてきたし、流されてきました。それは否定しません。けど、だからって、今回の勝負まで諦めるわけにはいかないんです！　だけど、専用機はまだ来ていない。……だから打鉄で出ると言ってるんです。申請についてはそちらで手を回してください。全部が全部とは言いませんが、この状況は明らかにそちらの落ち度なんですから、そのくらいはしてもらいます」

真耶はほとほと困ってしまった。セリフからも様子からも、一夏は撤回する気がないと理解できるのだ。
それだけでなく、真一文字に結ばれた唇と、真っ直ぐに見つめてくるその瞳が、普段の一夏とはまた別の格好良さを醸し出しており、真耶の心拍数を上昇させてならないのだ。
確かに言っていることは分かる。人情的に見ても論理的に見ても、一夏の言っていることは間違っているわけではないのだ。
けれど、自分に決定権はないのだ。だからどうしようも出来ないのだ。

（――――って言えたらいいんですけどね……）

真耶は深い溜息をついた。――分かっているのだ。そんなのは所詮建前であり、言い訳でしかないことは……。

「……わかりました。打鉄を用意します。ただし、出るのは時間ギリギリまで待って下さい。現在、織斑先生が状況確認も込めて先方

に向かっています。もしかしたら間に合うかもしれません」

それは儚い希望だった。既に開始時刻まで十分を切っている。これで間に合ったとしたら、一体どんな奇跡だというのか……。

そう思うと同時に知っていた。――奇跡を起こすのはいつだってヒトである、ということを……。

「わかりました。ギリギリまで待ちます。……それと山田先生、我が儘を言ってすみません」

「いえ、いいんですよ。生徒の願いを出来るだけ叶えるのも、先生の役目ですからね」

ポツリと付け足された一夏の謝罪に、真耶は満面の笑みで答えたのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「織斑さんは大丈夫でしょうか……」

アリーナに立ち、セシリアはポツリと呟いた。

間もなく試合が始まる。まだいくらか時間に余裕はあるが、普通なら既に姿を現していてもおかしくはない。――しかし、未だ一夏の姿はない。出てくる様子も見受けられない。

セシリアの胸に不安が募る。

「心配することはない。一夏は来るさ、必ずな……」

それを吹き飛ばすかのように総一が言った。顔には笑みを浮かべており、不安な様子は微塵もない。――普通なら見えもしないし聞こえもしない距離であるが、ＩＳのハイパーセンサーがそれを可能

としていた。

「こうと決めたらどこまでも突っ走る、一夏はそんな熱いヤツだ。そしてあの日、俺たちは約束をした。……ならば、アイツがそれに答えないはずがない。たとえ専用機が無くとも、量産機で出てくるだろうさ」

「そうでしたわね……。織斑さんもまた、あなたと同じくサムライなのでした。フフ、これは彼に失礼をしてしまいましたわね」

不安は去った。

ならば、あとは時が来るまで適度な緊張を維持すればいい。

（さあ、早くおいでくださいな織斑さん）

（早く来い、一夏……！）

両者の胸の内で炎が猛った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――――時は遡る。

「ちょっとアンタたち、今なんて言った！　何をやった！」

とある街道にて、金髪青眼の少女が吼えていた。怒っているためにその瞳はつり上がっているが、それでも目を惹く美少女であることに変わりない。

その隣には一人の少女。そして少女たちの前には数人からなる男たち。

少女は俯き、自らの頬に手を当てている。一方の男たちは下卑た笑みを浮かべている。……状況を推察するのはそう難しいことでは

なかった。

「あん？　なんだテメエ？　……まあいいや。今何をやったか、だったな？　こうしたんだよっ！」

言うと同時、その拳を振り抜く男。

拳速。そしてタイミング。そのどちらを取っても防げるタイミングではない。

「耳が聞こえないの？　私は何て言ったのかも訊いたはずだけど？」

――――相手が普通の少女であったのなら。……男の繰り出した拳は、物の見事に逸らされていた。そこに、ムダな力は一切込められていない。

「情状酌量の余地もあるかと思ったら、いきなりコレか……。ま、事情を確認するのは一人起きてれば充分だし、他のヤツらは……取り敢えず寝てなさい」

深い溜息を吐いて、金髪の少女はそう言った。――それと同時にその姿が消えた。……少なくとも、もう一人の少女と男たちにはそうとしか認識できなかった。

「ガ……ッ！？」

「グェ……ッ！？」

「ゲェ……ッ！？」

そして次から次へと奇声を上げて倒れ伏す男たち。

ここまでくれば殴りかかった男にも分かった。――自分は『決して手を出してはならない相手に手を出してしまった』ことが……。

「な、なんなんだよ、テメエは！？」

残った男は勢いよく叫ぶ。――しかしその声音は振るえており、恐怖に囚われているのが明白だった。

「……なんだ。知ってて言ってるのかと思ったけど、本当に知らなかったんだ……。私の知名度もまだまだってことか……」

男の言葉に感じるところがあったのか、金髪の少女はその動きを止める。そして呆気に取られた表情を浮かべたかと思えば、次の瞬間には目に見えて分かるほどに落ち込んだ。

少女がそうなるのも無理はなかった。少女の名はリリィ・シャトーブリアン。芸能界において押しも押されぬ人気アイドルグループである『ＢＬＯＳＳＯＭ』の一員なのだから……。

「ま、私のことはどうでもいいわ……。アンタはただ、こうなった経緯を話しなさい。――あなたもいいわね？」

だがそれも一瞬のことで、リリィはすぐさま立ち直り冷徹な瞳で男に告げた。――かと思えば、少女の方には打って変わった優しい面持ちで訊ねる。

「わ、わかった……」

「……はい」

男と少女は――理由を異にするにせよ――どちらもが弱々しく頷いた。

「……なるほどね。――アンタが悪い！」

理由を聞いたリリィはウンウンと頷いた後、ビシリと男を指さした。

「確かに昨今の世の中はどうかと思う。仕事をクビにされたアンタにも同情する。……けど、それとこの娘は関係ないでしょうが。ムシャクシャして当たり散らしたい気持ちは分かるけどね。文句があるんなら、アンタをクビにしたその会社の上司に言いなさい。……そのための手助けならしてあげるわ」

サバサバとした態度でリリィは言う。そこには先程までの怒りもない。

「手助けって……どういうことだよ？」

呆気に取られたのは男の方である。女尊男卑の昨今、何かあれば『男が悪い』で定着しているのだ。

現にこの男とて、女上司のミスによってクビにされたのだ。ただ『同じ仕事についていた』というそれだけの理由で……。

だというのに、この金髪少女は――全てではないにせよ――自分の言い分を認めてくれたのだ。

「一言で言うなら仕事を紹介してあげる。コレを持ってその住所に行きなさい。正式採用されるかどうかまでは保証できないけど、試用だけならしてもらえるわ」

リリィはサラサラとペンを走らせ、何事かを書いた名刺を男に渡した。……それも人数分だ。

「そこは実力主義だから男も女も関係ないわ。自分の実力を認めて

くれるところで頑張って、そうして見返した方が暴力に頼るよりもよっぽど気持ちいいでしょ？」

そう言ってリリィは微笑んだ。

「すまねぇ……ありがとう嬢ちゃん。――あんたも、あたっちまってすまなかった。謝ってどうにかなることじゃねぇが、この通りだ」

それに感極まったのは男である。涙と鼻水で顔をクシャクシャにしながらリリィに謝罪と感謝を告げ、殴ってしまったもう一人の少女には土下座をして謝罪した。

「……頭を上げてください。そういった事情があるなら仕方ないとも思いますし、私も不注意だった部分がありますから……」

「すまねぇ。……俺に出来ることがあったら言ってくれ。誠心誠意、詫びさせてもらうつもりだ」

「……だったら、食事の際はうちを利用してください。『五反田食堂』って食堂やってますから」

「五反田食堂、だな。わかった。飯ん時はそこを利用させてもらうぜ。……本当、すまなかったな。――オラ、立てお前たち。これから履歴書買いに行くぞ……！」

こうして一応の決着がついた。――そして計り知れない拍手と歓声が包み込んだ。

繰り返すがここは街道であり、いざこざを起こしていたのは人気アイドルである。

短時間ですめばこうはならなかっただろうが、実際には事情確認やら何やらで結構な時間が経っている。

それだけの要素が組み合わされば――そして『お涙頂戴の人情劇』みたいなやり取りだったことも合わせれば――こうなっても別にお

かしくなかった。

「いやー、良かったですねぇ主任」

「……だな。久々に人の素晴らしさを見た気がするよ」

「――って、主任！　時間！　ヤバイですよ、時間！」

「時間？　うぉ！？　忘れてた。急ぐぞ！」

――――だが、それによって別の問題が生じてしまった。……コントのようなやり取りをしているこの二人は倉持技研の技術者である。

両者は織斑一夏の専用機『白式』をＩＳ学園へと運搬している最中であった。

その途上、何の変哲もないところで人垣が出来ているのを発見した二人は、早めに出たため時間に余裕があったことも相俟って、興味本位の野次馬と化したのだ。

それでもすぐに発てば問題なかったのだろうが、決着がつくまで見入ってしまったのである。

そんなことをしていれば、時間の余裕がなくなるのも当然であった。

「ねぇ、おじさんたち、どうかしたの？」

そこに件の金髪少女が話し掛けてきた。食堂の娘とは離れたらしく一人である。

「あぁ、いや……」

どうかしたの、と問われても男たちは答えられない。見物に興じてしまったのは自分たちだからだ。

「あれ？　もしかして……おじさんたちって倉持技研の人？」
「あ、ああ。そうだが？」

いきなり職場を当てられ、男たちは戸惑いながらも肯定する。……こんなことをしている間にさっさと出発すればいいのだが、焦って気が回らないらしい。

「じゃあ、荷物って織斑一夏の専用機？」
「……ッ！？」

続けての言葉に男たちは言葉を失った。
何故それを知っている？　いや、たとえ知らないとしても、どうしてその質問を提示することが出来る？　この少女は一体何者だ？
――織斑一夏に関する情報の扱いは慎重に慎重を重ねている。……その事実を知っている二人は自然と身を堅くした。

「倉持の人。それも織斑一夏に関わる人なら分かるよね？　コレの意味」

しかし、それも長続きはしなかった。
リリィが示した物は華を模ったバッジだ。その中央に『花』の文字が刻まれている。――二人はそれの持つ意味を理解してはいない。ただ、そういった紋章を持つ組織が織斑一夏の護衛に当たっている、としか説明を受けていないからである。
それでも、大局的に見れば少女が味方であることは分かる。そしてそれさえ分かれば、この二人には特に問題などなかったのである。

「手伝ってあげるよ。私にも責任が無い訳じゃないしね」
「手伝うと言われても、もう時間が……」
「あーもう！　だ・か・ら・手伝うって言ってんのよ！　騙された

と思って、取り敢えず人目につかないところまで車を走らせなさい！」

言葉の意味は分からないが、それでも二人は少女に従うことを選択した。……リリィの剣幕を男たちが恐れたためであり、男たちが藁にも縋りたかったためである。

そして――――

「……信じられない」

――――主任は思わず呟いた。眼に映る景色が信じられない。ＩＳ学園が映っているのである。それも、目前とは言わないが残り時間から鑑みても充分に間に合う距離にいるのだ。

何が起こったのかも分からない。少女の言うままに車を走らせ、停め、目を瞑り、再び目を開けたらここにいたのだ。

「ほら、呆けている暇なんてないでしょ？　急がないと本当に間に合わないよ？」

促され、車を動かす。――ああ、確かにその通りだ。自分たちは技術屋であり、こんなのは自分たちの気にするところではない。

そして程なく、様子見に出てきた織斑千冬と合流した。

二人が気付いたとき、既に少女の姿は消えていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あー、あっぶなかった～。遅刻の原因が私にある、なんて総一や桜華に知られたらどうなるか分かったもんじゃないしね～」

近場の建造物の屋上からその光景を見下ろしつつ、リリィは安堵

の息を零した。――瞬間。チャキリ、と音が鳴った。そして寸暇をおかずに首横を刃が奔る。

「そうか。ここまで遅れたのはお前が原因だったのか……」

「ア、ハハ、ハハハハ……」

リリィは力なく笑うしかできなかった。聞こえた声とあてがわれた刃から、声の主が真宮寺桜華だと判断できたためである。

桜華は華撃団員として異端である。その理由として、彼女の行動が『輪の外側のヤツなんてどうでもいい』という考えの元で執られていることが挙げられる。

しかしその反面、桜華は『輪の内側にいる者には限りない愛着を持つ』のだ。問題を起こせば叱るし、その逆もまた然り。

彼女が『花組』で戦っているのは、被害者を慮ってのことではない。『仲間』が傷付くことこそを厭うているからである。

その事実を知っているのは『輪の中にいることを許された者たち』だけであり、上層部とて知らない者の方が多い。

ともかく。

そんな桜華だからこそ、リリィを見逃す理由はない。

流石に斬り付けたりはしてこないだろうが、説教は確実である。

――リリィは表情を萎ませた。

「……まあいい。間に合ったんだからな」

だが、不思議なことに見逃してくれた。――だからこそ、リリィの恐怖は増す。

「ど、どうしたの……桜華？」

「なに、簡単なことだ。先日の礼だよ。……それはともかく。楽しく観させてもらうとしよう。ほら、月組謹製の双眼鏡」

身体をさすりながら言う桜華に、リリィは合点がいく。
何があったのかは分からないが打ち傷をこさえて帰ってきたことがあり、それをリリィが癒したのである。……つい先日のことだ。
「誰が勝つと思う？　順当に『蒼の公女』？　それとも件の『希望の星』？　大穴で『我等が隊長』？」
「織斑一夏の一点買いだ」
これにリリィは驚いた。桜華の性格からして総一に賭けると思ったのだ。
「……総一が大穴ってところにはつっこまないのね」
冗談めかして返しつつ、リリィは驚く反面喜んでいた。――織斑一夏との間に何があったのかは分からないけど、桜華の輪が広がるのは素直に嬉しいわね。
「ま、事実だしねぇ～。それでも俺は親友補正で大神の一点買いだけど～」
「うわっ！？　ビックリした～！　ってことは私が『蒼の公女』か～」
そして、音もなく加山が現れ、予定調和の驚きを見せるリリィ。
……人気絶頂の現役アイドルとしてツッコミどころ満載な姿がそこにはあった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
どうやら奇跡というものは起こるらしい。――いや、それとも誰

かによって起こされたのか……。
その真実を知る術など一夏には存在しない。興味はあるが知る必要もない。大事なのはただ一つ。『専用機が届いた』という事実に他ならないのだから……。
しかし、試合開始まで時間がないのも確かな事実。無駄に出来る時間など残されてはいない。

「き、来ました！？　来ましたよ！？　織斑くんの専用ＩＳ！」
「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

真耶と千冬の言葉を聞きながらも、一夏はそれに反応を示さない。その時間すらも惜しいのだ。
真っ直ぐに自分の専用機として用意された、その純白のＩＳに駆け寄り、触れる。

「うん……？」

初めてＩＳに触れたときのような感覚が流れなかったことに一瞬疑問を覚えるものの、すぐにその理由も分かった。ＩＳから流れ込んでくる情報が教えてくれたのだ。
無作為に流れ込んでくる、しかしそれでも確固たる流れを持った情報に導かれるままに、専用機を起動させる。
前方装甲を展開しているＩＳに、座り込むように背中を任せる。自分という主を認識したのだろう。すぐさま装甲が閉じ、次いで空気を抜く音が響きわたる。
空気が抜けたと同時に飛来する一体感。
ＩＳネーム：白式。戦闘タイプ：白兵専用型。特殊装備：無し。操縦者：織斑一夏。――まるで客観的に捉えたような情報として、自分たちのことがわかる。

「不幸中の幸いってのはこのことかもな……」

思わず一夏は呟いた。

元より不利は承知の上だが、それでも白兵型というのはありがたい。なにせこの一週間というもの、自分は剣しか振っていない。これで射撃型だったりした場合は目も当てられない結果となっていただろう。なにせ遠距離戦の心得などないのだ。接近戦の心得が転用できなくもないだろうが、期待は出来ない。

白兵専用の部分が気にならないでもないが、元より自分はそれほど器用な性質じゃない。逆にこの方が良いのかもしれない。

――――戦闘待機状態のＩＳを二体感知。

「ん……？」

ハイパーセンサーのもたらす情報に、一夏は自然と釘付けになった。

ＩＳネーム：ブルー・ティアーズ。戦闘タイプ：中距離射撃型。特殊装備：有り――現時点では詳細不明――。操縦者：セシリア・オルコット。

ＩＳネーム：狼虎。戦闘タイプ：近距離特化型。特殊装備：無し。操縦者：大神総一。

「便利なもんだな、ハイパーセンサーって。……っと、ゲートが開くか」

ゲートの完全解放まであと二秒弱。

ここは何か気の利いたセリフでも言って出たいところだが、何がフラグとなるか分からないので自重する。アニメ然りマンガ然りゲーム然り、下手なことを言えばそれが引き金となって結末が決定し

てしまいかねないのだ。
だが、だからといって無言で出るのも芸がない。
「織斑一夏。『白式』、出ます……！」
結局、某有名ロボット作品のセリフを流用することにした一夏だった。

第5話（後書き）

切に感想が欲しいです。

幕間：セシリア・オルコット　1

ＩＳ学園のアリーナにて一夏の参戦を待つ最中。
微かに、傍目にはそれこそ分からぬように、セシリアは視線を移す。……視線の先には一人の少年。
自分と同じ年のこの少年は、しかして自分の遙か先を往く。
そう、彼こそは正に『騎士』であり『サムライ』だ。
彼と出会ったればこそ、今の自分がある。
未だ途すら定まっていないが、それでも、その事に気付けた分だけ、自分は迷いながらでも進んでいる。……そんな確かな実感がある。
貴族とは『誇り』の体現者であらねばならない。それ出来なくして『貴族』とは名乗れない。……それがセシリアの考えだ。
その語源がどこから来たのか、セシリアは知らない。しかし『貴き一族』と書くからには、そう呼ばれるに相応しい行いをしたが故だと考えている。人々の尊敬を、感謝を、憧れを、それらを捧げられるだけの行動を取った故の尊称である……と。
そう思っていたというのに、いつの間にか、自分はその事を忘れていた。
両親が死んだ後は、名門貴族であるオルコット家を潰すまい、とただそれだけを考えていた。
ではそこに、果たして『貴族』としての価値はあるだろうか？
誇りを体現する者だ、と自分は胸を張って言えるだろうか？　――否だ。
与えられた席にしがみつき、そこから離れたくないが故にもがき苦しむ。……何と醜いことだろうか。
だが、間違いなく自分はその『醜いモノ』の一人だったのだ。
それを否定することは出来ない。……してはならないのだ。
そして、その事に気付かせてくれたのが、彼――大神総一その人

である。
その時の美しさを、全身を駆け巡った衝撃を、セシリアは今でも鮮明に思い出せる。
一夏が来るまでのほんの一刻。
自戒も込め、セシリアは過去に想いを馳せることにした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日、セシリアは中々寝付けなかった。
自分、引いてはオルコット家の知名度を上げる目的もあって、映画『黒髪の貴公子』への出演を求められた際には一も二もなく受諾した。
そしてその撮影に自分の家を使うことになり、参加スタッフを家へと泊めた。
名門貴族の肩書きは伊達ではないということか、部屋数だけは余っているのも一因である。……それは同時に、両親の死と時を同じくして辞めていった者たちの多さを否応なくセシリアに実感させることになった。
普段であれば、忙しさのあまりそこまで気を回すことはなかった。忘れることができた。
だが、今回のことにより改めて気付かされた。母親の凄さを。自分の実力を。自分の人望のなさを。……確かに残ってくれている者たちもいる。しかし、如何に実力を併せ持っているとは言え、幼馴染みであるチェルシーが自分の専属メイドを務めている現実が、一つの事実を突きつける。そう、今もなお残っている者たちの大半は『チェルシーよりも仕事が出来ない』という事実だ。
曲がりなりにも現在のセシリアはオルコット家の当主である。その専属メイドということは、当然ながら相応の実力を求められる。それも一極特化ではなく万能的な実力だ。……言い換えれば、メイド、執事、調理師、庭師……それら全ての頂点に立てるだけの実力

を有する者が当主の専属メイドであり専属執事なのである。
チェルシー以外に残っているスタッフも充分に仕事は出来る。しかし、それとても一極特化故のこと。総合的な実力で比較すれば、チェルシーの方が圧倒的に優れている。
確かに実力と年齢は比例しない。それはセシリアも認めている。……だが、いくら何でもこれはヒドい。この現実はヒドすぎた。
否応なく現状を叩き付けられたためだろうか、身体は疲れているというのに……眠れない。眠れなかった。
気晴らしに窓から外へと視線をやり、そして気付いた。
それが目に入ったのは、本当に偶然だった。
今回の主役として、東洋からわざわざ招かれた一人の少年――大神総一。
彼が庭にいる。
ただ庭にいるだけじゃない。手に何かを持って動いている。
月明かりと星明かりから、それが剣――東洋で言うところの『カタナ』だと分かった。
その姿を目にして、セシリアは視線を逸らすことが出来なかった。
ただ剣を振っているだけだというのに、何故こうも美しいと感じてしまうのだろうか。
暫し考えたセシリアは、その理由に思い至った。……腑に落ちた、とはこのことを言うのだろう。
彼の剣には、自分の持たざるモノを感じるからだ。剣を習ったとか習ってないとか、そういうのとはまた別次元の話。
そう、彼の剣は確かな錬磨の跡なのだ。研鑽を積んだ証なのだ。
自分が頑張ってない、とは言わない。……しかし、費やした歳月が違うのだ。
彼自身がどう思っているのかは分からない。未だ満足していないのかもしれない。……それでも、その剣は確かに誇れるモノだ。誇っていいモノだ。
今の自分は持っていない、けれどいつかは持ちたいモノ。

彼の剣はその具現。可能性の一つだ。
ああ、認めよう。今この瞬間、自分は彼に憧れた。……そしてだからこそ、自分は彼に認められたい。認めさせたい。
だからといって、おざなりの賞賛では意味がない。おためごかしの賛礼など以ての外だ。……心底からのモノなればこそ、価値があるのだ。
自分は誰だ？　セシリア・オルコットだ。生来の負けず嫌いだ。
ならば、やってみせよう。歳月が違うと言うのであれば、その分は密度で補ってみせる。
故に、今この場を以て、月と星に誓おう。
「大神総一……わたくしは必ず、あなたに認めさせてみせますわ。わたくしという存在を、セシリア・オルコットの名と共に」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そう、あの日、あの瞬間。
自分は目標を得たのだ。
以降、私人、セシリア・オルコットはそれだけに時間を費やしてきたのだ。
何度挫けそうになっただろうか。何度諦めそうになっただろうか。……覚えてなどいない。覚えられないほどに多かった。
つまり、それだけ自分は甘い時間を過ごしてきたということの証明だった。
悔しかった。屈辱だった。……だからこそ、それをバネに頑張れた。
思えば、あれほどに頑張ったのは生まれてから初めてだったような気がする。
だからだろうか。あの日々は、自分に限りない充足を与えてくれていたように思う。

何度も打たれた。何度も撃たれた。……文字通り、身体に叩き込まれた。
結果、嫌が応にも順応した。順応せざるを得なかった。
そして、こと回避能力に限っては、格別に上昇したのである。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「久し振りに連絡を寄越したかと思えば、開口一番に『暫くの間泊まりたい』と来た。旧交を温めるのかとでも思って軽く了承したんだが……まさかそんな理由だったとはな。いや、流石はセシリア・オルコットだ。負けず嫌い、ここに極まれり……と言ったところか？」
「好きに仰ってくださいな。ええ、わたくしは確かに負けず嫌いですから」
「ははっ。拗ねるな拗ねるな。いいよ。幼馴染みの恋路だ。全力で後押ししてやろうじゃないか」
「恋路って、ちょっとリーヴァ！　わたくしはそんな……！」
「ははっ。照れるな照れるな。……お前が総一に近付けばシャルロットも危機感を抱くかもしれないしな」
「？　何か言いまして？」
「いや、別になにも。それじゃあ、早速やろうか。まずは体力をつけることからだ」

そんな会話をし、入念な準備体操のあとランニングを行った。……行ったのだが。
遅い！　何だそのザマは！　この程度出来なくてどうする！　ガッツだ！　ガッツを見せろ、セシリア！　足を止めるな！　歩いてもいいが決して足は止めるな！　――そんな叱咤激励の嵐だった。
また、ランニングが終わってもそれで全てが終わりではない。仮宿であるブルーメール邸に戻ったあとは、神楽による正座指導と箸

の特訓が待っていたのだ。……正直、ランニングよりもこっちの方が辛かった。
そんな日々が何日か続いた。
現金なもので、百メートルでも十メートルでも昨日より進むことが出来たと分かれば、完全に嫌気が差すこともなかった。
それは正座や箸の扱いにしても同じ事で、一分でも長く座ることが出来れば、掴めなかった物が掴めるようになれば、やはり完全に嫌気が差すことはなかった。
教え手であるリーヴァと神楽が、自分と同い年である部分も大きかったのだろう。負けず嫌いは、ここでも遺憾なく発揮されることとなった。
そして、体力がついたらついたで実戦形式の訓練に移行した。
そもそも、こうしてブルーメール邸を訪れたのはそれが目的なのである。……現在のセシリア・オルコットにとって曲がりなりにも誇れるモノがあるとすれば、それはＩＳに他ならない。
そしてＩＳの特性上、自分が動けるに越したことはない。射撃型であるが故に『近付かせなければ問題ない』と思っていたが、では実際に近付かれた場合の対応策があるか？　と問われたら何もないことに気付いたのだ。専用ＩＳ『ブルー・ティアーズ』には接近戦用のショートブレード『インターセプター』が用意されているが、所詮は申し訳程度の代物である。……いや、自分が『申し訳程度の代物』にしてしまっているのだ。
近接戦闘の心得など、参考書に書かれているようなさわり程度しか持ち合わせていないのである。必然、イメージなど定まらず武装展開にも時間が掛かる。名称を口に出すことでようやく、といった有様だ。……そんな状態で近接戦闘装備など使えるはずがない。使われるのが関の山だ。
ハッキリ言って、それは問題だった。確かに射撃能力には自信があるが、それでも『決して相手を近接戦闘範囲には入れない』と言えるほどには高くないのだ。……であるならば、至急近接戦闘能力

を底上げする必要がある。少なくとも、口に出さずに武装展開出来るくらいにはならないといけない。
なにせ、今度の春からは『ＩＳ学園』に通うことが決定しているのだ。曲がりなりにも代表候補生（エリート）である自分が、初心者同然の行為をする。……嫌だ。嫌すぎる。そして恥ずかしすぎる。
エリートとは、ある種の『理想』でなくてはならないのだ。そう思わせなくてはならないのだ。
無論、気のおけない友人などが相手であればそんな必要はない。しかし、そうでない相手にはそうする必要が出てくるのだ。……立場故のしがらみ、というやつである。
それら諸々を加味すると、ブルーメール邸は格好の位置づけだったのである。
ブルーメールに赴けば、自然と北大路もついてくる。そしてここが重要なのだが、両家共に『武術』を奨励しているのだ。
ブルーメールの祖はバイキングである。荒れ狂う海に暮らし戦闘に意気を燃やしたとされるその気質は、今もなお変わることなく受け継がれている。貴族の誇りもまた然りだ。
一方の北大路は、男なら『日本男児』、女なら『大和撫子』であることを家訓にしている。……『男尊女卑』時代の名残と捉えることも出来るが、問題なのはそこではない。男は当然の如く、女であっても『いざというときには家を護る』という観点から武術を伝えている、この事実こそが重要なのである。
セシリアにはよく分からない考えではあるが、確かに神楽の所作は、同性である自分から見ても美しいと感じるモノだ。……ならば、一概に斬って捨てるのではなく、そういうモノだと認めてしまえばいい。
そう、当初はそのように意気込んでいたのである。
しかし――――
「きゃ……っ！？」

「かふ……っ！？」

――――そうそう上手く転ばないのが現実です。

「反応が遅い。ＩＳに頼るのはいいが、頼り切るな。……そんなザマでは、ＩＳを纏っていないときに襲われたらアッサリとやられるぞ？」

地面に這い蹲るわたくしの前で、散々打ち据えてくれた幼馴染み殿は溜息混じりにそう仰りやがりましたのです。

「おっしゃり……はぁ……たいことは……はぁ……わかる……のですが……はぁ……こちらからも……一つ……はぁ……よろしいですか？」

呼吸を整えつつ問い掛け、何だ？　と首を傾げる幼馴染み殿にわたくしは言ってやることにします。

「そんな棒きれで貫通ダメージを与えるって一体どういう事ですかあああぁぁぁーーーっ！？」

そう、目の前の幼馴染み殿は正に理不尽でした。

如何なる現行兵器も『白騎士』には通じなかったからこそ『ＩＳに勝てるのはＩＳのみ』などと言われ、現在の『女尊男卑』の風潮を巻き起こしたというのに……。

リーヴァは何の変哲もない木の棒――何でも『コン』というらしいです――で、ＩＳのバリアーはおろかシールドエネルギーすらも突破して、貫通ダメージを与えてきたのです。

それ則ち、人間の身でありながら兵器以上の攻撃力を有している、ということを意味します。……流石にこれはつっこまずにいられま

せん。

「何を言うかと思えば……。いいか、セシリア？　この世の中、『絶対』なんてものは限られてるんだ。大多数がそうだったからと言って、決して全てがそうだとは限らないのが世の常だ。……実際にやってみて分かったが、ＩＳの防御はある意味では物凄く堅いが、ある意味では物凄く脆い」

「……どういう意味ですの？」

「純粋な物理攻撃には限りなく強い、それがＩＳだ。……その一方で、東洋で言うところの『気』に代表される、ある意味でオカルトに分類されるモノには滅法弱い。現に、まぁ『気』とは別だが、そういったモノを流しつつ攻撃したら御覧の通りだからな……。これならば、神楽はおろか俺の知る限りあと数人は同じ事が出来る」

「一体何なんですの、その『力』とは？　理不尽にも程があるのですが……」

「ふむ。言うだけならば構わないか……？　親友なればこそ言うが、他のヤツには言うなよ？　頭がおかしいと思われるからな？　一言で言えば『霊力』だ。精神エネルギーの一種、とも言われている。分かりやすく言えば、ＲＰＧで言うところのＭＰだな。ＭＰを消費して攻撃する代わりに、相手のＨＰだけではなくＭＰにもダメージを与えている……と言えば分かりやすいか？」

「それ……わたくしにも出来ますの？」

「出来るか出来ないかで言ったら……出来るだろう。女性は男性に比べて保有する霊力が高いからな。……また、ヒトは無意識に霊力を使うこともある。スポーツとかで『急に感覚が鋭敏になった』とか『不意に道筋が見えた』とか言われるのがその典型だな。……しかし、自在に使うためには己自身で霊力を掴まなくてはいけないし、それは多分に感覚的なモノだ。故に、出来るか出来ないかは己次第だ。……さて、休憩はもう充分だな？　構えろ」

そして――――

「あう……っ！？」

「いやあああぁぁぁ……っ！？」

――――再度、わたくしは打ち据えられたのでした。

それでも、人間の底力というやつは存外バカに出来ません。数日も繰り返されれば慣れるもので――寧ろ『痛み』に対する忌避感が強まったためでしょうか――ある程度は躱すなり防ぐなり出来るようになりました。

ですが……それは更なる地獄の始まりでした。

リーヴァだけでも手一杯だというのに、そこに神楽が加わって来たのです。しかも、神楽の得手は弓。則ち遠距離攻撃です。……『言に偽り無し』とはこのことを言うのでしょう。神楽もまたアッサリと貫通ダメージを与えてくれました。

つまり、至近のリーヴァだけでなく、遠方の神楽にも気を配らなくてはならないのです。ハイパーセンサーによって位置を割り出すことは出来ても、操縦者であるわたくしがそれを認識できなくては意味がありません。

ええ。お決まりの如く地面に転がることとなりました。

それでも、この訓練は充分な益をもたらしてくれました。

やはり数日後には、ある程度躱すなり防ぐなりが出来るようになったのです。

どうやったのか？　言葉で表すのは凄く簡単です。一言ですみます。『撃ち落としました』……これだけです。

そもそも、慣れない近接武器でリーヴァの相手をしているだけでも手一杯なのに、更に神楽の矢も近接戦闘範囲内に入ってから対応するから無理なのです。そんなこと、出来るわけがありません。

それよりは、まだ遠くにあるうちに撃ち落としてしまった方が遙かに楽です。幸いにして、わたくしにはそれを可能とするだけのス

ペックを持つ武器があります。……そう、特殊装備『蒼い雫（ブルー・ティアーズ）』です。
とは言え、レーザーを放ったところで当てられそうにありません。そんなイメージは湧きません。……ですが、ぶつけるだけなら出来ます。イメージも浮かべることが出来ます。
痛みに対する忌避感のあまり、越えられなかった壁――『蒼い雫』を制御しつつの同時機動――をこうもアッサリと越えてしまっては、喜べばいいのか悲しめばいいのか……。我が事ながら複雑です。
ええ。それで調子に乗ったのが第二の罠でした。
通常時に『蒼い雫』を動かせば、やはり制御に集中しなければならず、相変わらず無防備になってしまったのです。……あの時の落胆といったら、それはもう言葉にすることも出来ません。
そこからはまた訓練内容が変わりました。神楽の放った矢を撃ち落とすのがメインとなり、時折リーヴァが仕掛けてくる攻撃を躱すことになったのです。
比重が変われば、やはり上手くはいかないもので、わたくしはまたも地に伏せることとなりました。
ですが、それでも利点というモノはあり、『蒼い雫』や『スターライトｍｋ？』の扱い方が上昇する運びと相成ったのです。
結果、普通の状態でも同時機動が出来るようになりました。
その後はまた元の訓練に戻り、只管に躱して防いで撃ち落として……の繰り返しです。
そして、まだまだ荒削りですが回避能力は二人のお墨付きをもらえるようになったのです。
リーヴァ本来の得手は槍。そして神楽は弓。……両者に共通しているのは、その本領が直線攻撃という点です。特にリーヴァは接近戦を主とするので、攻撃から到達までの距離が短いのです。……つまり、判断する時間も少ないのです。
リーヴァほどの腕があれば、見て躱す、といった余裕もあるかもしれません。……ですが、わたくしには無理です。そんな余裕はありません。

だからこそ、なのでしょうか。身体が勝手に反応するようになったのです。たとえ目を瞑っていても、それは変わりありません。……ある一定以上の危険には、という注釈がつきますが。

なお、いずれの訓練も『ホワード技研』のパリ支部を借り受け、その施設内で行っていたのでＩＳ運用協定に違反しているわけではありません。……わたくしの『ブルー・ティアーズ』も『ホワード技研』の協力を受けて開発された機体ですから、機密云々に関しても大丈夫でしょう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「大丈夫か、セシリア？　一体どうした？」

過去を回帰していたセシリアは、総一の心配げな言葉で現実へと戻された。

はてな、と首を傾げる必要もなく、総一の言葉の意味が分かった。……自分の身体が目に見えるほどに震えていたのである。ついさっきまでは何ともなかったのに、いきなりこうも震え出せば、そりゃあまともな人格を有している者なら心配もするだろう。

「ええ、大丈夫ですわ。何の問題もありません」

他人事のように己の状態を捉えつつ、セシリアは答えた。――震えの理由など分かっている。『訓練』という名を借りて行われた恐怖までをも思い出してしまったからだ。……けれど、それは確かな自負へと繋がっている。自分はあの恐怖を乗り越えたのだ。

「さあ、油断無く参りますわよ？　セシリア・オルコット」

セシリアが自分にそう言い聞かせると同時。

威風堂々、『白』を纏った織斑一夏がアリーナにその姿を現した。

幕間：セシリア・オルコット　1（後書き）

今回、回想と言うこともあって実験的に一人称を組み込んでみたんですが、どうでしょうか？

第6話

「さて……まずは準備運動といくぞ、一夏！」
「参りますわよ、織斑さん！」

開始の鐘が鳴るや否や、一夏は総一とセシリアの二人から攻められることとなった。
総一の二刀流とセシリアの射撃が間断なく一夏を襲う。端から見て、それは猛攻と言えるものだった。

「この……！　うわっ！？」

次から次へと送られるハイパーセンサーの警告に、一夏は対応しきれない。
総一の攻撃に気を取られればセシリアの攻撃が、セシリアの攻撃に気を取られれば総一の攻撃が迫っている。こちらから攻撃する暇などまるでない。護りに専念するだけで手一杯だ。
今もまた、総一の斬撃を防いだかと思えばセシリアの放ったレーザーが迫っており、それに気を取られた瞬間、総一によって蹴られたのだ。

（名は体を表す、って言うが……。まったく、『狼虎』とはよく言ったもんだ。しかし、色といい接近戦仕様といい、どことなく親近感が湧く機体だな……）

崩れた体勢を戻しつつ一夏は思った。
一夏の『白式』と同じく、総一の『狼虎』もまた白を基調とした機体である。その武装は格闘戦を想定した手甲と脚甲、そして白兵戦を想定した刀が二振り。

ハイパーセンサーによると、刀はそれぞれの名を『剣狼』と『刃虎』というらしい。そして手甲が『狼牙』で脚甲が『虎爪』ときた。……まさしく『虎』と『狼』尽くしである。

また、それこそが近距離特化型の由縁といったところか。

白兵とは『刀・剣・槍などの武器』である。つまり、白兵戦とは『刀・剣・槍などの武器によって行われる接近戦』に他ならない。……故に、『白式』の白兵専用型とは手にした得物で戦うことを主眼に置いている。

しかし『狼虎』の場合は、同じ接近戦タイプでも『白式』とはまた違う。更に密着した状態での戦闘も考慮されているのだ。

武器に大仰な名前が付けられているだけなら然程問題は無い。

しかし、それを繰り出しているのが総一となれば話は別だ。こと剣撃において、総一の技量が一夏に勝っているのは既に証明されているのだ。

そして、どうやら格闘においても総一の方が勝っているらしい。

（だが、それにしちゃ……）

一夏は疑問を抱く。――何故、未だに自分は健在なのか……？

シールドエネルギーは確かに減っているが、それでも六割以上は残っている。試合開始から既に二十分以上が経過しており、当然、何度となく危険な場面はあった。……しかし、依然として自分は健在。

その事実は、とても幸運や悪運だけですませられることではなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……まったく。大神といいオルコットといい、揃いも揃って演技派な事だ」

一夏と同じ疑問を抱く者は当然おり、ピットからリアルタイムモニターで観戦していた千冬もその一人であった。……しかし、一夏と違って既に答えは見付けてある。

「どういうことですか、織斑先生？」

千冬の言葉が聞こえたのだろう。隣に立つ真耶が質問した。

試合前に一夏の叫びを聞いていた真耶は、初めのうちこそ二人掛かりで攻め立てる総一とセシリアに憤慨していた。しかしそれも程なく収まり、同じ疑問を抱くこととなった。その答えは未だ出ておらず、分かるのはＩＳの起動が二回目と思えぬほどに健闘する一夏の凄さのみ。

「なに、簡単なことだよ、山田君。大神もオルコットも、織斑に攻撃を当てる気など最初（ハナ）からない、ということだ」

千冬の説明を聞いた真耶は、それこそ信じられなかった。現に、一夏は何度となく二人の攻撃を喰らっている。

「納得できないか？　無理もない。大神もオルコットも、当てる気はないが当たっても構わない、と思っているのだろうからな」

「当てる気はないが当たっても構わない、ですか？」

「ああ。剣で言えば、どこが悪いかを言いつつ寸止めをするところを、言葉には出さず寸止めもしないだけだ」

「あの……それは、当てる気満々、ということではないのですか？」

千冬の言葉を聞いて、真耶は余計に混乱した。

「いや、違う。なにせ自分の攻撃が当たりそうになってももう一人

が邪魔をするんだ。ならば、結果的に自分の攻撃が当たることはない。……ほら、当てる気など最初からないじゃないか？　そもそも、この試合はバトルロイヤルという体裁を取っている。最終的には誰もが敵であり、そこに連携など望むべくもない。……大神とオルコットは、そういった意識の片隅を突いているのさ。だから、まるで示し合わせたかのように互いが互いの邪魔をしていても、観戦している大抵の連中は気付かない。誤魔化される」

言われ、真耶は思い出す。――確かにそうだ。織斑くんが致命的な隙を見せたとき、大神くんとオルコットさんは必ずと言っていいほど互いが互いの邪魔をしていた。

「……」

真耶は絶句した。――何なのだそれは……？　大多数の観客に気付かれることもなくその様な真似が出来るというのか……？

「とは言え、それが大神とオルコットの本領というわけではないだろう。二人にとって、試合が始まってから今までの流れは、織斑に対する指導（チュートリアル）でしかない。スポーツマンシップ云々に則って、織斑の準備が終わるのを待っているのさ」

「……一次移行（ファースト・シフト）、ですね？」

その瞬間、まるで真耶に答えるかのように一夏が光に包まれた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ようやくか……」

「ようやくですわね……」

その光景に、総一とセシリアは揃って溜息を吐いた。……それは正に二人の心中そのものである。

試合というものは平等（フェア）な条件の方が望ましい。しかし、実際そんなことは不可能だ。身長体重腕力脚力その他諸々が個々人によって違うのだから当然である。

それでも、可能な限り近付けることは出来る。

では、どこにその条件を見出すか？　総一とセシリアは一次移行にそれを求めたのだ。

稼働時間は論外だ。圧倒的にセシリアの方が勝っている。次点の総一との差もかなりのものであるというのに、専用機が届いたばかりの一夏とでは比べるべくもない。

だからこそ、一次移行に求めるのは当然と言えば当然の帰結であった。

しかし、ただ一次移行を待つだけでは意味がない。

正直な話、戦闘開始後に何もしていなければ、一夏機の一次移行はもっと早く終わっていた筈なのだ。余計な負担が掛からないのだからそれも当然である。……だが、ことＩＳに限って言えばそれでは意味がないのだ。

ＩＳの意識が操縦者を理解していくのが最適化（フィッティング）であり、言うなれば『大雑把に理解した時』に迎えるのが、その第一段階である一次移行だ。

しかし、ただ突っ立っているだけで理解できることなど如何ほどのものだろうか？　それにどれだけの意味があるだろうか？　ハッキリと言えば無意味に等しい。

ＩＳに求められるのが『戦闘』である以上、いくら負担が掛かろうとも動き回った方が、最終的には遙かにプラスとなる。

また、それはＩＳだけではなく一夏にも言えることだった。

一夏はＩＳの稼働時間が極端に少ない。言い換えれば、ＩＳを装着した状態での動き方が分かっていないに等しい状態なのだ。

そこを攻め立てればどうなるか？　当然、一夏は嫌が応にもＩＳ

の動かし方を理解せざるを得ない。
その上で一次移行すれば、その上昇幅は普通に移行するよりも遙かに大きい。
それはつまり、より試合を楽しむことが出来る、ということだ。
だからこそ、総一とセシリアは共謀して一夏を攻め立てたのだ。
二人の戦闘タイプが異なるので、一夏の理解しなければならない量が増える、という利点もあった。
誤算があったとすれば、一次移行までの時間が予想以上に掛かったことである。……まぁ、データが少ないのだからそれも仕方ない。
そうは思っても、人間なのだから感情を抑えきることなど不可能である。
先の楽しみが増えた、と言えば聞こえはいいが、それは延々とお預けを食っている状態であり、欲求不満は募る一方だったのだ。
二人の溜息はそれ故のものである。

「一夏！　準備運動はもう充分だな？」
「ここからは……本気で行かせてもらいますわよ？」

総一とセシリアの言葉に、しかし一夏は反応を返さない。……返せなかった。
この瞬間において一夏の意識は、ただその武器にのみ注がれていた。
近接特化ブレード『雪片弐型』。
形状と名称。この二つが組み合わせが、一夏の意識を掴んで話さない。――これは現役時代に千冬姉が使っていた物だ。『弐型』という点から考えるにそれその物ではないんだろうが、下地においているだろうことは間違いない筈だ。

「これを、俺が使う……」

本当に、俺に扱うことが出来るのか？　これは千冬姉の象徴だ。今まで、俺を護ってきてくれた人の象徴だ。それはつまり『守護』の象徴ということでもあるんだぞ……？　――畏れが一夏を怯ませる。

そしてそれは、一夏につい先日のことを思い出させた。

他ならぬ自分が『この手で他人を傷付けた』という掛け替えのない恐怖が甦る。――自分の全霊を込めて繰り出した木刀。簡単に防げる筈のあの女性（ひと）はそれを無防備に受け。鈍い打撲音。吹き飛ぶ身体。

尋常な勝負の果てだったのならば、どうにか納得もできただろう。けれど、これは違う。

彼女は敢えて無防備になった。そして、自分はそれに気付いた。気付けた。……なのに、剣は止まらなかった。止められなかった。

彼女の自業自得、と割り切ることも出来ない。

何が起こるか分からないのが世の中だ。こういった『事故』、こういった『危険性』は、カタチを変えて日常のそこかしこに紛れ、溢れている。

彼女はそれを改めて気付かせてくれたのだ。……感謝こそすれ、無碍に扱うなど出来ようはずもない。

だけど、所詮それは注意点にすぎないのだ。

忘れていたわけではない。考えていなかったわけでもない。……だが、未だに答えは出ていない。乗り越えてなどいないのだ。

「あ、ああ――――」

そう、詰まるところ、それが起こるのは必然だったのである。……無論、剣を続けていれば、遅かれ早かれいずれは起こり得ることでもある。

ただ、誰の想定よりも早く起こってしまったのだ。

予想外に早く起こってしまったのだ。

結果的に、一夏に『護る』という信念を抱かせることになった千冬。
一夏に剣を執る『理由』を思い出させた総一。
相手を傷付ければ自分もまた傷付く、という――真っ当な人間にとっては――純然たる事実をその身で味わわせた桜華。
誰が悪い、というわけではない。
敢えて言うならば、タイミングが悪かった。

（護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた護る傷付けた……）

想いと結果。相反する矛盾。『護る』ことは『傷付ける』こと。
識ってはいた。……しかし理解しきれてはいなかったそれが、ここにきて一夏を苛む。
一夏にとって『守護』の象徴である『雪片』。『護る』という、一夏が剣を執る理由。……信念。
そして、自分がこの手で、剣で、悪意も何もない他人を傷つけた、という揺るがない事実。
これらが揃ってしまった以上、一夏は嫌が応にも理解せざるを得なくなってしまったのだ。『過去』とは違う、ということを……。
一夏は『過去』にも、その手で他人を傷付けたことがあった。
そいつらは寄って集って数人掛かりで箒を苛めていた。直接の暴力こそ振るってはいなかったが、間違いなく『言葉』の暴力は振るっていた。
それに対して一夏はキレた。直接の暴力を振るった。千冬にも迷惑を掛けた。……けれどそれは、一夏の中の『正義』が相手に『悪』を感じたが故のこと。
そして、釈然としない思いもあったが――千冬に迷惑を掛けたく

ないが故に――結局、一夏はその気持ちを呑み込んだ。
これは――ある意味で――過去に自分が目を背けた事柄の再燃なのだ。
そして、これに決着をつけるのは『善悪』じゃない。そんなモノで決着をつけていい事柄ではないのだ。当たり障りのない言葉に流されてはいけないのだ。……そうは思うものの、そう簡単に答えは出ない。
或いは、もっと時間があればまだマシだったのかもしれない。……だが、いくら何でも短すぎた。
一夏は至って普通の感性を持つ人間である。
そんな彼にとって――恐怖を乗り越えるにも、折り合いを付けるにも、答えを見付けるのにも――たった数日という期間は短すぎたのだ。

「――――あああああああーーーーーーーーっ！！」

絶叫が上がる。
それはさながら魂の慟哭。
そして――――

「――――まずい！」

霊力が暴走している！　――いち早くそれに気付いたのは、当然の如く総一だった。
人は時として無自覚に霊力を用いることがある。それは不思議でも何でもない。自らの持てる力を使うのは至極当然のことだ。
しかし、所詮は無自覚の行為。用いられる霊力は基本的に微々たるものであり、結果、自らが霊力を使用したことに気付くことはない。
霊力に関する知識もない者がそれに気付くとしたら、それは気付

かざるを得ないほどの効果をもたらした場合のみだ。
その代表格が『危険回避』と『暴走』である。その共通点は二つ。
一つは『感情の高まり』が引き金となっていること。そしてもう一つは『当人による制御など望めない』ということだ。
もたらされる結果はただ一つ。『破壊』である。……危険回避の場合は『救済』と言い換えることも出来るかもしれないが、所詮は言葉遊びの域を出ない。

「間に合うか……！？」

総一は一夏の元へと駆ける。……しかし、途中で止まらざるを得なかった。

「やれやれ、待機しておいて正解だったか……」

そんな言葉を発しつつ、それが降り立ったからだ。……霊的戦闘部隊『花組』の用いる現代の霊子甲冑。その名を『稟武（りんぶ）』。総身を染める桜色と発された声が、操縦者が真宮寺桜華であることを示していた。
桜華、と叫びそうになるのを総一は堪えた。桜華の意図が分からない以上、下手に関係性を示すわけにはいかない、という判断からである。

「しかし、これはまた予想外だな。まぁ、どうでもいいことか。どうせ、やることをやるだけだ。……さて、織斑一夏。どうやらそのザマでは宿題が出来なかったようだな？　まぁ、分からないでもないよ。こちらとしても、よもやこんな短時間で起こるとは思ってもみなかったからな……。ともかく。これも縁だ。私の手でお前を止めてやろう」

言い捨て、桜華は構えた。
総一は動かない。……言い様から、桜華のやろうとしていることの目処がついたからである。付け加えれば一夏の霊力暴走も治まってきている。
この状況下で下手な横出しをすると、水泡に帰してしまいかねない。
しかし、それとて桜華をよく知る総一だからこそ可能な判断である。当然ながら、他の者にそのような判断は出来ない。出来るわけがない。
それを証明するかのように耳をつんざくような独特の音が鳴り響き、同時に奔った一条の閃光が桜華の前方空間を貫く。……セシリアの威嚇射撃である。

「突然現れてのその物言い……失礼にも程があります！」
「セシリア・オルコットか……。すまないが、部外者は黙っていてもらおう。……それと警告を。下手に動くな。仕掛けてくるのならば、こちらも自衛のために攻撃せざるを得ない。だが、それは私の本意ではない。そもそも、この試合を楽しみにしていたのは私も同じであることだしな……」
セシリアの行動を目にして言葉を耳にしながらも、桜華はそう言ってのけた。……一夏を向いたままに淡々と。
「な……っ！？　バカにしてっ！」
こちらの善意を無碍にするような相手に向ける慈悲など無い。
生来の気質も相俟って、セシリアはこの試合が始まってから一切使っていなかったそれをついに起動させた。
フィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が開いている、四つの自立機動兵器。

それこそが特殊装備『蒼い雫』（ブルー・ティアーズ）。……機体名と同じ名のそれだが、正しくは順番が異なる。そもそもは武装の方が先であり、それを積んだ実戦投入機の一号目だからこそ、機体にも同じ名前が付けられているのだ。

そして手には二メートルを超す長大な銃器――六七口径特殊レーザーライフル『スターライトｍｋ？』――が握られている。

セシリアは『蒼い雫』を踊らせながら、『スターライトｍｋ？』を乱入者へと向け――――

「墜ちなさい！」

――――怒号と共に撃ち放った。

「警告はしたぞ……！」

目標（ターゲット）である桜華は何ら慌てることなくそう言い放ち、セシリアへと向かっていった。

ＩＳと霊子甲冑の違いはあれど『稟武・桜華機』は一夏の『白式』と同じく白兵専用型だ。攻撃するためには接近する必要がある。

「自殺行為な……！」

それを確認したセシリアは、『蒼い雫』を『スターライトｍｋ？』の射線左右に高低をつけて配置、発射する。

これにより相手の動きを阻むことが出来る。大きく迂回すれば簡単に回避されるが、相手が近接戦闘型である以上、それが自身の不利には直結しない。千日手になるかもしれないが、何も自分が仕留める必要はないのだ。なにせ相手は侵入者だ。時間をおけば教師陣が駆けつける。自分はそれまでの時間を稼ぐだけで良い。――これがセシリアの思惑であった。

弱腰と捉えられるかもしれないが、そんなのは知ったことではない。相手の力量も分からない以上、安全策を取るのは当然だ。なにせ世の中にはＩＳを用いずにＩＳのバリアーを破ることが出来る存在がいるのだ。しかもそれが自分の親友二人である。狭い範囲にそれだけいるなら、広い範囲にはどれだけいることか分かりはしない。そして、この侵入者は生身じゃない。……ならば、この相手もそれを可能とするだけの力量を持つ、と仮定して動くべきだ。――勇気と蛮勇は別物であることを、今のセシリアは理解していた。

しかし――――

「な……っ！？」

――――相手がその刀で以て『レーザーを斬り裂く』というのは想定外であった。……あまりの出来事にセシリアは驚愕の声を漏らし、その思考を静止させてしまう。

その間も桜華の動きは止まらない。移動、回転、跳躍、あらゆる動きを取り入れて、速度を落とさぬままに全ての『蒼い雫』を斬り捨てる。

そして――――

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

セシリアが我を取り戻したとき、既に乱入者の姿は目前と言っていい距離にあった。その手の刀は一度振り抜かれたらしく、今は返しの太刀を入れようとしている。

とある経験からセシリアの回避能力は並ならぬ域に達していた。それは、たとえ忘我の内だとて発動してしまうほどである。……つまり、セシリアが己を取り戻したとき、既にその身体は初撃を躱し終えていたのだ。

セシリアは即座に思考する。――この相手に自分の考えは通用し

ない。レーザーを斬り裂いた事実と行為がそれを証明している。ＩＳに携わる者にとってそんな行為は考えられない。そして、僅かな間に『蒼い雫』を片付けたことからも近接戦闘能力の高さが窺える。『ブルー・ティアーズ』にも近接武器はあるが、技量差を鑑みれば無意味に等しい。……ならば、意表を突いた攻撃しかない！

刹那の内に結論を出したセシリアは隠し球を出す。

それこそがウェスト・アーマーに装着された『蒼い雫』に他ならない。しかも、これは先程までとは違う実弾兵器。弾道型（ミサイル）だ。

無論、こんな物をこの至近距離で発射、爆発させてしまえば自分もただではすまない。バリアーと絶対防御によって直接の外傷を負うことはないだろうが、その衝撃までは防ぎきれないからだ。……しかし、現状で意表を突ける攻撃はこれしかない。

セシリアは無意識に取った回避行動の流れに身体を預けたまま――――

「諸共っ！」

――――それを発射した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その瞬間、桜華は瞠目し、セシリアに対する認識を改めた。

確かにセシリア自身を仕留める気はなかったが、それでも武器だけは頂くつもりだった。武器さえ奪えばどうすることも出来ないだろう……と。

しかし、そんな自分の一撃をこの相手は躱したのだ。しかも、ただ躱したわけではない。忘我の状態で、極々自然に躱してみせたのだ。

それはセシリアの実力の高さをハッキリと表していた。

ただ武器を使っているだけならば、今の一撃を躱す事など出来な

かったはずである。為す術無く、アッサリと武器を破壊されていたことだろう。
しかし、セシリアは回避した。
こいつ、デキる！　――相手の思わぬ実力に、桜華は本来の仕事を脇に昂揚する。
しかし、それも束の間。セシリアの目に光が戻ったのを確認した桜華は冷静にならざるを得ない。なにせ無意識のままでも回避行動を取れる相手なのだ。
見て分かるほどに相手は射撃型だ。近接武装は極々限られているだろう。だからといって、それが相手の近接戦闘能力に直結するわけではない。こうも見事な回避行動が取れる以上、近接戦闘に慣れていたところでおかしくもなんともない。
そして、光が戻ったセシリアの瞳には不屈の闘志が透けて見える。自分の不利を理解した上で、尚も現状を打開しようとしている。
まったくもって厄介な相手だ。しかし、だからこそ楽しい！　――最早、完全に本来の仕事を忘れている桜華だった。
とは言え、仕事を忘れるほどに昂揚しても、戦闘に対する冷静さまでは失っていない。
さて、この状況下で相手が取り得る手段（テ）は何だ？　――桜華はありとあらゆる情報と経験則から思考する。
セシリアは攻撃を選択している。そして自棄になったわけではなく、確かな理性も残している。……ならば、自分の安全性も考慮した攻撃が選ばれるはずだ。しかし、ＩＳには『バリアー』と『絶対防御』とやらがあるらしく、安全性という面では全ての攻撃が考慮されている、とも言える。だが、ＩＳは人間が動かしているものだ。当然の如く心理的側面が反映される。直前の行動から、セシリアは『真宮寺（じぐん）桜華にレーザー攻撃は通用しない』と判断しているはずであり、そこに近接戦闘能力の高さも加味してくるだろう。故に、一番可能性が高いのは意表を突いた攻撃だ。そして少なくともそれは、この試合が始まってから一度も使っていない、と考えていいだろう。

先程のセシリアが良い例だ。自分にとって想定外の事が起これば、どうしても停滞してしまうのがヒトというものだ。結論としては暗器の類。それも隠しておくような物ではなく、堂々と存在を主張している物。そして、もしあるとするならば爆発物。私が斬り払うことを想定した上での選択ならば、それが最も効果的だろう。これならば『衝撃』というダメージを与えることが出来る。現在のセシリアの体勢からそれが可能そうな箇所は……腰部アーマーただ一つ！

その思考は刹那の間に行われ、結論を出した桜華は――――

「見切った！」

――――裂帛の気合いと共に返しの太刀を繰り出した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

溜息と共に現れたその存在に、一夏は瞳を奪われた。

その存在を忘れたことはない。忘れられるわけがない。二年前のあの日から、それは一夏にとって『正義の味方』の象徴に他ならないのだから……。

しかし、それはおかしなことを言う。あの日以来会ったことなどないというのに、それ以外にも会っているかのような口振りだ。そして、自分に対して剣を向けてきた。『正義の味方』が、自分に対して……。

一夏は掠れるような声を出した。――その構え、その威圧、その言葉、その声……それら全てが、つい先日出会った、剣を交えその果てに自分が傷付けた少女と重なる。

その構えからあの時も、もしかして、とは思った。けれど、自分は気のせいだと思うことにした。思い込んだ。何故なら、『正義の味方』とは正体不明でなければならないのだから……。

しかし、目の前の存在はそれを否定する。いかな『正義の味方』

とて世界の中では埋没する普通の少女にすぎないのだ……と。
そして、偶像は現実の前に砕け散り、一夏の精神は混乱する。
そも、ヒトが憧れるのは『自分には無理』ということを理解した上での場合がほとんどだ。
例えば神話や伝承に謳われる英雄たち。例えばテレビで華々しい活躍を見せる芸能人。例えばオリンピックに出場するようなスポーツ選手。
自分には出来ないことをやってのけるからこそ羨ましく、自分もいつかはこうなりたいと憧れる。
憧れで終われば問題ない。しかし、行き着くところまで行ってしまえば、それは絶対視へと成り代わる。……『ヒト(じぶん)では到底辿り着けぬ完全にして完璧な存在』として見てしまうのだ。
それが砕け散ってしまったのだ。一夏の混乱は当然と言える。
放たれるレーザー。振られる刀。壊れるビット。呆然とするセシリア。それに向かう『正義の味方』。……一夏の視界の中を流れ行く光景である。
今の一夏にはその意味を理解する事が出来ない。
しかし、それでも、その光景には一夏を動かすナニカがあった。
刀は何だ？　――凶器だ。
凶器とは何だ？　――傷付ける、道具だ。
では、何を傷付けようとしている？　――セシリア・オルコット。
セシリアとは何だ？　――自分の友人だ。少なくとも、自分ではそう思っている。
当たればどうなる？　――斬られる。
斬られればどうなる？　――血を流す。
血を流せばどうなる？　――最悪、死ぬ。
それを防ぐ術はないのか？　――ある。
それは自分に可能か？　――可能だ。
それをやったとして自分はどうなる？　――深く、傷付くだろう。
では、やめるか？　――否だ。

何故だ？　――それをやらなかった方が、自分はより傷付くだろうことが分かるからだ。
それでは最終確認だ。自分に可能な手段とは何だ？　――斬る。他ならぬ、俺の手で。憧れた、あの存在を……。
覚悟は決まった。
携えた『雪片弐型』に想いを乗せて――――

「やめろーーーーっ！！」

――――咆哮と共に一夏は駆ける。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ちぃ……っ！」

状況の推移に総一は思わず舌打ちした。それぞれがそれぞれの行動を取り、入り乱れようとしている。
桜華の登場に一夏は呆然とし、セシリアが桜華へとレーザーを放った。
放たれたレーザーを桜華が斬り裂き、その光景を目にしたセシリアが呆然とする。
そのままアッサリと片が付くかと思えば、その状態でセシリアは桜華の攻撃を回避してみせた。
それに触発されて桜華が昂揚する。……戦闘愛好者（バトル・ジャンキー）の悪い癖だ。既に当初の目的など忘却の彼方だろう。
セシリアは桜華に。そして桜華はセシリアに。
そこで完結すれば話は簡単だったのだろうが、桜華の登場から茫と突っ立っているだけだった一夏が咆哮と共に桜華へと向かった。ご丁寧にその手に握っている武器――ハイパーセンサーによると『雪片弐型』というらしい――には霊力が込められている。

とても『洗練されている』とは言い難い霊力伝達だが、その威力は推して知れる。
しかし、だからこそ、危険だ。
一夏が桜華へと横合いからあの攻撃を繰り出せば、今の桜華は一夏を斬り捨てるだろう。
いや、桜華の台詞を聞くに、どうも桜華は一夏へと好感情を持っているようだ。『輪の外』には何ら関心を示さない桜華だが、ひとたび『輪の中』に認めてしまえばどこまでも真摯な態度を取る。……だとすれば、一夏は斬り捨てられないかもしれない。しかしそれは、桜華が斬られることを示している。
それにそもそも、桜華が一夏を『輪の中』に認めていたら、という仮定の話でしかない。
桜華が一夏を認めていなければ、やはり一夏は桜華に斬られるだろう。……普段であればそこまでの危険性はないだろうが、今の桜華はセシリアの思わぬ強さに昂揚している。普段があまりに淡泊なため、一度こうなってしまうと割って入るのは至難の業……と言うよりは『輪の中』の者しか割って入れない。
セシリアの心配は無用だろう。こと戦闘という一面で現時点での桜華とセシリアを比較すれば、総合的に見て桜華の方が優れている。
そのことは桜華自身分かっているはずであり、そうでなければ『桜華が昂揚している』という現実が否定されてしまう。アッサリと決着がつくはずだった相手が思わぬ強さを持っていたからこその昂揚だ。
熟さぬうちに果実を取ったところで、美味しくも何ともない。……多少の美味しさはあるかもしれないが、想像できるその後には比べるべくもない。
故に、自分の取るべき選択は一つしかない。

「狼虎滅却――――」

総一は自らも武器に霊力を込めながら――――

「――――はあっ！　――――」

――――桜華を庇うように一夏の前に立ち塞り――――

「――――金甌無欠！」

――――護りの技を繰り出した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――――爆音が鳴り響く。神々しいばかりの光が迸る。爆煙と砂塵が巻き起こる。

それにより、観客席からはアリーナの一切が窺えなくなる。

また、それはアリーナにいる一夏たちにも同じ事が言えた。本来、ハイパーセンサーであればこういった状況下においても情報を得ることが出来る。それほどにハイパーセンサーは優れている。

しかし、今回はそれが仇となった。高感度すぎるが故に、この至近距離での爆音と爆煙は防ぐことが出来なかったのである。

一時的に目と耳がイカレてしまった形だ。失聴、失明の危険性こそないものの、現時点では視界は白く染まり、耳には何も届かない。

だからこそ――――

「……ではな、私はもう行く。……土壇場で取った行動だ。たぶん、一夏ももう大丈夫だろう」

「分かった。……しかし、今度からは予め知らせておいてくれ」

「可能ならな」

「報告は忘れるなよ？」

「加山に任すさ」

――――総一と桜華の会話を聞き取る者もいなければ、見ている者もいなかった。
総一と桜華は持ち前の霊力で『霊子フィールド』を展開し、音と光を遮ったのである。
霊子フィールドとは、平たくいえば『物理エネルギー』と『精神エネルギー』の中間点だ。どちらの特性も併せ持っているが、純然たるカタチが定まっていないため――人によって向き不向きはあるが、攻撃性を持たせたり、逆に防御性を持たせたりなど――どうとでもカタチ創れるのが特徴である。
これは個人でも展開できるが、『霊力を持つもの同士がその波長を同調・共鳴させることにより増幅することが可能』という特性も持っている。
もっとも、現在の総一は生身でなければ霊子甲冑を纏っているわけではなく、ＩＳを装着している状態だ。……故に、霊力を全力で行使することは出来ない。現時点でそんなことをすれば、ＩＳが壊れてしまう可能性があるからである。
実際、直前に放った『金甌無欠』からして全力にはほど遠い。
霊子フィールドによる障壁を展開、障壁内の霊力を物理変換することで損傷の修復――生身の場合は怪我の治癒――をし、余剰の霊力を他者に分け与えることで霊力の回復を促す、といった工程を踏むのが本来の『金甌無欠』である。
しかし、先に放った『金甌無欠』は、前方に楯の如き小さな障壁を展開するので手一杯だったのが実状だ。
なので、霊子フィールドの展開も、実質は桜華がほとんどを受け持った形である。……霊力波長を同調・共鳴させることで多少増幅されてはいるが、それでも『破邪の血統』と謳われる膨大な霊力を保有しているが故に、そして他ならぬ真宮寺桜華だからこそ可能なことであった。
なにせ、霊力波長を同調・共鳴する際は、基本的に『触媒』の霊

力性質を有する総一がメインなのである。
自分から合わせるのと、他人に合わせてもらうのとでは、その難易度は段違いだ。……必然、その負担も大きくなる。
霊力保有量だけでいえば、リリィにも可能であろう。……しかし、実際には不可能だ。
総一も桜華も、霊力を発現させる際には剣を持った状態が一番やりやすい。……剣を持ってなくとも発現は出来るが、その際の疲労は剣を持った状態の比ではない。
一方のリリィは、特に媒体を用いずとも霊力発現に支障はない。……逆に言えば、『剣を持った状態での霊力発現』という感覚自体が分からないのである。
無論、付き合いの時間などそれ以外にも理由は挙げられるし、総一の方からも幾分か寄ったからこそ、今回の増幅は成り立っている。……早い話が『例外』だ。

「う……っ！」
「くぅ……っ！」

そして、ようやく一夏とセシリアの視界が開けたとき、そこにはもう乱入者の姿は見えなかった。
アレは何者だったのか？　その目的は何だったのか？
選手と観客に様々な混乱と憶測を呼び起こしつつ……こうして『ＩＳ学園一年一組クラス代表選出戦』は予期せぬ結末を迎えたのであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

試合の後。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

一夏はＩＳ学園の敷地内を走り回っていた。――確かめたいことがある。もういないかもしれないけど、その確証もない。……なら、いるかもしれないんだ。
その思いに駆られ、ただただ一夏は走り回る。
そして、不意に身体が震えた。瞬間、一夏は勢いよくある方向へと向き直る。――ああ。この感覚は覚えがある。殺気だ。あの日、あの時、あの人が放った殺気だ。
一夏は一目散にその方向へと走り行く。
果たして、その場にあの人はいた。どこかＩＳスーツを彷彿させる装いで……。

「呼んでくれて……助かりました」
「最低限の説明はして然るべきだろうからな。それでも、お前が気にしない様子を見せたのならとっくに帰っていただろうが……」
相も変わらずのその態度に、一夏はどこか安心感を覚えた。

「説明、してくれるんですか？」
「最低限はな。一言で言えば、お前は狙われている。『ＩＳを起動させることが出来た男』というその立場故に……。そして、その身に秘めたる霊力故に……な」
「霊力……ですか？」
一夏は戸惑いがちに問い返した。――前者だけなら分からないでもないが、後者は流石にどうかと思う。わざわざここまで手の込んだことをして冗談だとも思えないが、その言葉の連想させるイメージは突飛すぎる。
「ああ。信じる信じないはお前の自由。私はただ語るだけだ。……

そもそも、お前がＩＳを起動できたのもその霊力故だ。どうにも、ＩＳというものは霊力を動力源の一つにしているみたいでな……。調べた範囲内でだが、ＩＳの起動者は軒並み一定以上の霊力を保有している。また、基本的に男性はその霊力値が低い。お前は数少ない例外というわけだ。……まぁ、何だかんだと言ったところで、霊力もまた『力』であることに変わりはない。そして扱いきれぬ『力』ほど危険なものはない。……霊力というのは善性の表現でな。悪性表現にすれば『妖力』と言うんだ」

「ははっ。霊力の次は妖力ですか……。けど、言葉のもつイメージはおどろおどろしいモノを感じますね」

「まさしくその通り。世界征服だの世界崩壊だの、いつの世もバカげた考えを持つヤツはいるものだ。そいつらにとっちゃあ、お前は格好の獲物ってわけだな。なにせ上手い具合にお前の霊力を暴走させれば、爆発くらいは軽く起こせる。規模としては小さかろうが、何もないところで突然の爆発だ。当然、原因も思い当たるわけがない。怖いとは思わないか？　特に『学校』なんてのは一つの小世界だ。恐怖はすぐに蔓延する。そして悪意と怪異を招き寄せる。……そうなればあとは終わりだ。悪意が具象化した存在に物理兵器など効きはしない。時間の経過と共に世界は闇の底へと一直線だ。……そうでなくとも、思いがけず『力』を手にしたヤツは呑まれやすい。軽くお前の思考を誘導するなり暗示を掛けるなりすれば、尖兵の一丁上がりだ。いつ男女間戦争が勃発してもおかしくはないだろうさ」

一夏は全身を震わせた。当然ながら、軽々と信じられる内容ではない。寧ろ、バカバカしい、と一笑に付してもおかしくない内容だ。

しかし、それが真実正しいならば、幾らかは辻褄が合うのも紛う事なき事実なのである。

「まぁ、そうと予想できてみすみす見逃す必要もない。対応策は練られている。……総一がこの学園に通っているのもその一環でな。

ここまで聞けば予想もついているだろうが、総一も霊力保有者だ。
そう……総一はお前の護衛であり、教導役であり、万一の時の防波堤なんだよ」

一夏は言葉が出ない。出せるはずもない。

「……悪いが時間だ。私は帰らせてもらう。あとは総一にでも確認してくれ。それじゃあな」

認識が追いつかない。理解できない。納得できない。……言葉の意味を整理するので手一杯だ。

そして一夏が気付いたとき、その場には自分しかいなかった。

彼女がいつ去ったのかさえ分からなかった。

第6話（後書き）

ようやく『一年一組クラス代表選抜戦』が終了しました。
総一もようやく『狼虎滅却～』を発動……長かったです。
今回は『サクラ大戦３』より『金甌無欠』をチョイスしました。まぁ、その説明は独自解釈によるものとなってますので賛否両論あると思いますが……。
大神さんから『かばう』は外せませんけど、それだと盛り上がりに欠けるのでこうさせてもらいました。
感想、お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4466y/

ＩＳ　ＶＳ　霊子甲冑　～『白』の二重奏～

2011年12月2日01時16分発行